

た。鎌倉の末あたりから特に佛典に止まらず、外典類をも印行して僧侶の學問を普及するやうになつた。即ち詩文集や儒教書（殊に經書）を出版した事である。是も支那に行はれて居る適當の書を覆刊するのである。要するに入宋入元の僧たちが自身見聞して、歸朝の時に將來した書物を底本にして上印したのである。是に至ると昔日の刊書の外に一種特別の目的が加つて來た。即ち印刷物の種類が餘程一般民衆的になり、僧侶に非ずとも學問に従ふ者が五山の出版物を利用し得る事になる。其一二例を擧げる。

寶治元年（一九〇七）に

論語集註 十卷

が陋巷子によつて刊行された。此は宋版の覆刻で、日本最初の經書刊行である。當時は刊書は仲々困難な事であるのに、佛書にあらざる本を俗界の人が獨力で上印するのは餘程の特旨である。陋巷子が何者であるか判らぬのは遺憾である。とにかく日本の文化史上に特筆さるべき一事件である。此書は宋儒の手に成つたものであるから、宋の儒學の日本に行はれる先驅とも看られる。

佛書刊行には從來の信仰が伴ひ寧ろそれに促されて刊行を企てたのであるが、儒書刊行には

さう云ふ目的は無く全く學問の爲に論語を出版したので、陋巷子の心術は極めて高潔なものである。

此書刊行の後は引續いて儒書を刊する者もなく、一時中斷して凡百年を経て、元亨二年（一九八二）に

古文尙書孔子傳 十三卷

が僧素慶によりて出版された。是に於て陋巷子の志が無にならなかつた。此本も同じく宋版の覆刻である。や、長い跋文があつて、末に

元亨壬戌南至日學三命宗業沙門素慶謹誌

とある。此文中に「儒以知_レ道、釋以助_レ才」の句のあるのは、實に儒道と釋道との融和を意味するもので、是迄永年上流貴紳に専有された漢文學が佛僧の手を経て一般民衆化せんとする、それが爲には文學は佛僧の手を借りてすると云ふ模様が見えて居る。

一般に五山版本と稱するもの、大多數は禪僧の語録類である。其主なるを示すと 伏見天皇の永仁三年（一九五五）に

禪林僧寶傳

第二節 佛書刊本

が刊行せられた。其跋文の中に「將唐本僧寶傳抄寫、重新鈔梓、以廣其傳」とあり、末に時永仁乙未孟秋菴菴鏡堂覺圓圖書結緣、書寫比丘敏泰

とある。此僧寶傳は支那(宋)では大に大切にされ廣く讀まれた本である。此後再三覆刊を重ねた。次に後二條天皇乾元二年(一九六三)に

人天眼目

が刊行された。末に

乾元二年癸卯正月八日國堂叟瓊林記

とある。又(同年改元して)嘉元元年(一九六三)に

虛舟語錄

が刊出された。卷尾に

嘉元元、冬至日見山菴嗣法小師瓊林謹書

とあるので、前書出版者と同人なる事を知る。虛舟は宋の高名の禪師で、あちらの禪界には此の原本は大に行はれたものである。それを日本に傳へて弘通を計つたのであるが、僧の語録刊行の始と謂はれる。次に正和二年(一九七三)に

虛堂新添 八冊

が僧宗哲等によつて出版せられた。跋文の末に

正和癸丑開爐日拙孫宗卓敬書、沙彌宗哲等施財開版

とある。此本は「虛堂語錄」とも稱せられる。宋僧虛堂名は智愚、諸大寺を経て徑山寺に住した名僧である。

次に五山版として正中元年(一九八四)に

詩人玉屑 一冊

が刊行された。是は佛書以外の五山版の最初のもので、玄惠法印の開版に係る。同二年(一九八五)に

春秋經傳集解 三十卷

が僧圓澄によつて開版され、又

寒山子詩集 二冊

が禪尼宗澤によつて開版された。

以上は鎌倉期に於ける五山版系の印本である。併し五山版の本領は次の時代即ち吉野朝以後

にある。

此時代は鎌倉時代よりも一層政治の中心が武家（將軍）に移つた時で、南北朝時代はまだ其過渡期にて、公家と武家との趣味に、習慣に其他一般の事に互に融和せんとする傾を生じ、武家は京都風を學び公家は武家の氣風を學ぶやうになつた。室町時代になると公武の間に仲介した禪僧が益々勢力を得て、當時の新知識の發源となり、盛に書物刊行に努めた。それが悉く京都五山のはたらきとなつて現れた。其書物は僧侶の弘法に助けとなるもの、一口にいへば其頃の先賢前哲の言行に係る語録類が第一であるが、中には彼等のみならず一般學界の人に益を與ふる書物を刊行するに至つた。勿論新願を目的とした古風のものも多かつた。此は刊書によつて自他の罪障消滅を圖る筋のものである。其著しきものに曆應二年（一九九九） 光明院の代高師直刊行の

首楞嚴義疏注經 十卷

がある。

此曆應二年は足利尊氏が將軍職に上つた翌年で、是迄に其將高師直は官軍を敵として數十戰を交へ、多數の人を殺傷した。其罪障の過大なることを感じ自責に堪へなかつたものと思はれ

る。此師直版と同趣旨で出版されたものに足利尊氏刊行の觀應三年（二〇一二）の

大般若波羅密多經 六百卷

がある。此には刊行關係の人も多かつたと見えて、卷尾に比丘尼妙道以下十人の名が列ねられてある。其後に

大般若經一部六百卷爲宿願開板畢

觀應三年九月十五日正二位源朝臣尊氏

と署名して居る（版にて）。此尊氏の願經の後に其後嗣が同じく般若經を開板して

其一は

文和二年（二〇一三）九月廿二日

足利基氏の開板

其二は

延文二年（二〇一七）十一月廿一日

足利義詮の開板である。

右の基氏は尊氏の第四子、義詮は第三子で共に父を助けて官軍と連戦して之を惱した者であ

る。此かる亂暴人も叛逆の罪を償ふ志があつたので、孰れも

爲_二宿願_一開板畢

の短跋を記して居る。

以上は滅罪懺悔の爲に少くとも自己慰安の爲に刊書を行つた適例であるが、次の如く佛典刊行を善意を以てした例も少くない。

貞治二年（二〇二三）前若狹守平正俊開板の

梅山月林和尚語錄

應安七年（二〇三四）比丘永清開板の

大般若波羅密多經

の如きである。

吉野朝の世、曆應二年（一九九九）開板の高師直版「首楞嚴義疏注經」十卷は開版者の異様なるによつて甚だ著明のものである。此横暴殘忍比無き人も佛書刊行の功德によつて積惡を赦されん事を希ひたる心情が見えるのも面白い。即ち卷末に記して云く

師直熟思、今生僭尤不可勝計、矧是曠劫罪障、何以消除、因_レ茲謹開_二此真詮之板_一、以拔

積業之根、所_レ冀上報_二四恩_一、下資_二三有_一、同出_二妄想昏域_一、共入_二楞嚴覺場_一、曆應二禩季春中
澣 武藏守高師直敬誌

支那刊書史上宋版の優越

吉野朝以後の刊本は五山版若しくは同系統に屬するものが最も多い。五山とは前述の如く京都の禪宗大寺五寺を指すもので、刊行者は其寺院の僧侶である。刊行の書は半以上は宋元僧侶の著した語錄詩文集（外集）の類を宋元本から覆刊したに過ぎぬが、後には日本禪僧の著作をも新刊するに至つた。又次第に純然たる佛書のみならず、經史詩文、韻字の書類にも著手した。足利三代義滿の頃應永中が最盛期で、其部數は幾百種に上つたか判らぬが、現代に知られる者のみでも三四百以上になるであらう。

其板式について言ふと、南宋は刻本の最も盛であつた時代で支那に於て前後無比と稱せられる。書品の優美なること元明などの遠く及ばざることである。第一書物發行に多大の注意をなし、校訂頗る嚴密で誤字脱字少きは勿論、版下にする書は大抵其道の名手に寫させて一點一畫をもゆるがせにせず極めて正格の文字で書かれる。其上に雕刻亦精良で必ず良工を煩した。紙

も特選で墨もよく、印刷にも丁寧を盡して居る。「五雜俎」に

書の宋版に貴ぶ所以はたゞ點畫訛なきのみならず、また箋刻精好にして法帖の如くなればなり。凡そ宋刊に肥瘦二種あり。肥は顔(顔真卿)を學び瘦は歐(歐陽詢)を學ぶ。行款疎密意に任せて一ならず。而して家勢皆生動す。箋(紙)古色にして極めて薄く蝕はず云々

と稱美して居る。眞に其尤品は書の手本にしても可い程である。蓋し印書の技術の最も發達した時代と謂へる。單に形式外相の上で美いのみでは無い。校正が行届いて誤謬を傳へぬと云ふ内容的の優越點があるのである。同一の書で元明清と歴世重刊された多いものを一堂に集めて見ると、何人も宋版本を採るのは當然である。恰も好し日本の五山版は南宋版の流行後に起つたので、宋僧の語録など彼國に在る原刊本を底本にして覆刻する便利があつた。元版本覆刊になると稍々精良で無い。而して入宋入元の僧などに伴つて來朝した彫刻者も多數に在つた様であるから、覆刻するにも自國の手法を以てした本も少くあるまい。日本の刻者は此等支那専門家の技に負ふ所が多いであらう。

右の如き次第で其板式について言ふと、宋版を全然覆刊したもの、元槧本を復刊したもの、日本流のものとの三様になる。此中第三のものは甚だ少い。是を以て見ると我國の刊書事業はまだ幕僚時代に在ると謂ふべきであらう。即ち獨歩きの出來ぬやうな所があるのである。

足利氏の初期の出版中特色あるものに、

夢中問答集 三卷

康永三年(二〇〇四)頃

下野國足利淨因禪菴刊

がある。本書は天龍寺の開祖夢窓國師(疎石)が足利直義の問に對へた禪家悟道の書で、深遠の佛理を何人にも理解せられる事を目的として、特に假字交り文で記してある。今一例を擧げれば

問 衆生ノ苦ヲヌキテ・樂ヲアタフルコトハ・佛ノ大慈大悲ナリ・シカルヲ・佛教ノ中ニ・人ノ福ヲ求ヲ制スルコトハ何故ツヤ

答 世間ニ福ヲモトムル人・或ハ商賈農作ノ業ヲイトナミ・或ハ利錢賣買ノ計コトヲメクラシ・或ハ工巧技藝ノ・能ヲホトコシ・或ハ奉公給仕ノ功ヲイタス・其シワサハ・各コトナレトモ・其志ハ皆同シ・其アリサマヲ見ニ・生涯タ、身心ヲ苦勞スルハカリニテ・其志ノコトクニ・求得タル……………

の如きものである。

是迄の刊本は凡て漢文もののみであつたが、是に至つて假字交り本（片假字）が現れた。尤も是が最初では無い。少し以前の元亨年中に「黒谷上人語燈録」も假字交りで刊行された。即ち第二の假字文刊本と云ふ事になる。此書に兩版あつて、

甲は有界十行の大字本

乙は無界十六行の小字本

共に梵仙の跋文（康永元年(1190)再跋は康永三年(1194)）がある。甲はそれが行書、乙は細字の楷書である。處で可笑しいことには兩書とも巻頭に、

此集有兩本、此本爲正

と断つてある。今は何方が眞の正本であるかを判じがたい。恐らくは大字本が正であらう。而して乙の小字本の尾に

此版留在行道山、淨因禪庵常住公用

と刻してあるのは、蓋し後に出て本家を争はんとしたものであるまいか。

五山版の中にも圖畫入りの本三種あり、

一、禪家四部錄十牛圖

二、分類合璧圖像句解君臣故事

三、佛制比丘六物圖

とす。

五山版には支那の工人の手にて彫刻したものゝある事は前述の通りである。支那の宋版本の版心の下部に刻者名を記したものがあつた如く、本邦五山版の書に同じ跡を留めたものがある。即ち

月江語錄 下卷に

良甫、彦明

等の名が刻されてある。又

字鏡錄 には

良甫、孟榮、伯壽、福、林、沈、元

等の名又は姓のみのもが刻されてある。此中孟榮、伯壽は支那の刻字工陳孟榮、陳伯壽を指すなるべく、此兩人の事は「空華日工集」の應安三年九月廿二日の條に所載がある。此等を以

て推すと五山版本の刊行には支那職工の多數が使用されて居たことが判る。其多數の支那工人の中にも

俞良甫

と云ふ一人は、京洛附近の嵯峨に居て天龍寺の刊書事業に従ひ、且つ自己の獨力で幾部の書を刊出した。即ち

月江語錄

五山式

碧山堂集

般若心經疏

異版式

傳法正宗記

外に左氏傳、柳文、韓文の儒書があるが、此は非佛書の部に述べる。此人は工人と謂ふよりも學士と謂ふべきで、自身も「碧山堂集」「般若心經疏」の卷尾に學士と名のつて居る。因に「傳法正宗記」の卷末に

福建道興化路莆田朝仁德里住人俞良甫、於日本嵯峨寓居、憑自己財物、置板流行

歲次甲子（元中元年、二〇四四）孟夏四月 謹題

とある。此俞良甫出版の本を概して博多版と昔はいつた。博多に出版のあつた痕跡は見出されぬが、案ずるに當時外人（支那の入朝者）は先づ九州博多に著し、上陸して上方に向ふ習であつたから、歸化の元人俞も此徑路を取つて京都嵯峨邊に來たのであらう。其人が開版したので自然博多版と稱したに過ぎまい。切め博多に來つた時將來の漢籍も多數にあつた。其漢籍の彫法を學びて日本にて獨力印行したから此名も起つたらう。又博多版を一に堺版と云ふは、當時泉州堺は貿易港で支那、朝鮮の外船は博多に著して後周防の大内氏に行つて勘合符を受けて堺に入つた。支那舶來の書が博多に來り、それが堺で販賣せられ、買人の如き俞の本も此中に在りたれば何となく俞の開版本を堺版と云つたのであらう。

かく五山版により佛書刊行の流行を來す以前から其刊行事業の中心は特り京都に止まらざることとなり、其最も早きは五山版以前にある。その一二の例を挙げれば左の如きものがある

梵網菩薩戒經 一帖

跋

嘉禎丙申八月十九日上野國新田莊長樂寺彫模竟 勸進比丘隆圓

傳法正宗記 十二卷

弘安十年相模國靈山寺の僧寶積、寂慧等の所刊。

禪門實訓集 二冊 弘安十年所刊。

跋

此書有補於叢林久矣、然本朝未刊行、輒募衆緣、鑿梓畢工、今將此板捨入建長禪寺正續卷、廣印流通、不惟傳揚古德之先言往行、古倫亦有少酬夙志矣、弘亥中夏幹緣古倫識

かくて次第に地方に於ても出版をする氣運を將來した。即ち「碧巖集」の如き禪家提唱の第一書は五山版として京洛の出版數種に上る外に、

越後の本源寺

美濃の瑞龍寺

能登の總持寺

の諸版が出た。又吉野朝時代の中頃

武藏の普濟寺(禪宗)

にて其住僧光信、如見等の開版した

華嚴經

大集經

日藏經

月藏經

又門司の崇聖寺の出版の

華嚴經

又大和多武峯絹蓋寺の

法華經

など、續々出刊された。佛書刊出の地域が漸々擴張された證據である。今吉野朝期及以後の五山版の主なるものを擧ぐると凡そ左の如くである。

古林語錄 一卷 康永元(壬午)梵僊刊。

第二節 佛書刊本

- 感山雲臥起談 二卷 貞和二(丙戌)明超刊。
- 景德傳燈錄 十五卷 貞和四(戊子)正琳刊。
- 輔教編 二卷 觀應二(辛卯)妙葩刊。
- 勅修百丈清規 二卷 文和五(丙申)明千跋。
- 元亨釋書 三十卷 貞治—永和年間、單況刊(師練著)

本書は一般に五山版に屬せざるやうに思惟すれど東福寺出刊なれば此關係から五山版とする。

- 五燈會元 二十卷 貞治三(甲辰)彦貞跋。
- 夢窓國師語錄 三卷 貞治四(乙巳)妙葩刊。
- 禪林類聚 二十卷 貞治六(丁未)希果刊。
- 虎丘語錄 一卷 貞治七(戊申)妙葩刊。
- 南堂語錄 四卷 應安元(戊申)祖濤刊。
- 了菴語錄 三卷 應安元(戊申)刊。

- 破菴語錄 一卷 應安三(庚戌)妙葩刊。
- 應菴語錄 三卷 應安三(庚戌)妙葩刊。
- 宗鏡錄 二十五冊 應安四(辛亥)妙葩刊。陳孟榮刊刀。

第一百卷の末に

應安辛亥結制日、天龍東堂比丘春屋妙葩命工彫之江南陳孟榮刊刀

とある。

- 大應國師語錄 一卷 應安五(壬子)寶興刊。
- 永源寂室語錄 二卷 永和三(丁巳)性均刊。
- 洪覺範林間錄 二卷 庚曆二(庚申)臨川寺刊。
- 佛祖正傳宗派圖 一帖 永徳一(壬戌)南禪寺刊。
- 八方珠玉集 三卷 至徳二(乙丑)天池院刊。
- 冥樞會要 三卷 嘉慶元(丁卯)是一跋。
- 首楞嚴經會解 五卷 嘉慶二(戊辰)三會院刊。

佛祖正法直傳 三卷 應永三(丙子)刊。
藏乘法數 一卷 應永十七(庚寅)靈通刊。

周防(周州大先道雄居士欣然施財命工云々)の跋、末に「應永庚寅二月比丘靈通謹白」

地方の人が財を捨て、開版事業を助けた例が此に見える。都會の風が地方に行互つたもの。

聖一國師年譜及語錄 一卷 應永二十四(丁酉)方秀刊。

佛祖宗派綱要 一卷 應永二十五(戊戌)周印跋。

梵網菩薩心地品戒疏 三卷 應永二十七(庚子)刊。

佛光語錄 三卷 無年紀。

鎮州臨濟慧照禪師語錄 一卷 永享九(丁巳)法性寺(東經所)刊。

臨濟錄 一卷(前書に同じ) 延徳三(辛亥)刊。(美濃正法栖雲院)

季恭居士鏤梓。

孟蘭盆經疏新記 五卷 永正二(乙丑)刊。

此外刊行年代の記載無きもの、不詳のものに

義堂語錄 一卷

大慧武庫 一卷

羅庫野錄 二卷

人天寶鑑 二卷

普燈錄 二十卷 二種

佛教編年通論 四卷

宗門統要 三卷

隆興佛教編年通論 十卷

大鑑錄 一卷

六學僧傳 十四卷

佛智語錄 一卷

松源語錄	二卷
竺仙和尙天柱錄	一卷
南浦語錄	二卷
禪宗永嘉集	一卷
山庵雜錄	二卷
枯崖漫錄	三卷
釋氏要覽	七卷
祖庭事苑	八卷
釋明自鏡錄	二卷
佛鑑語錄	一卷
清拙語錄	一卷
翻譯名義集	七卷
大休正念錄	五卷

林間錄	一卷
中峯禪師語錄	一卷
中峯廣錄	十八卷
禪門寶訓集	二卷
雲門廣錄	三卷
高峯語錄	一卷
大川語錄	一卷
密庵語錄	二卷
虛堂語錄	四卷
石溪語錄	一卷
月庵語錄	二卷
聖一國師語錄	一卷
大慧普覺禪師普說	四卷

大慧普覺禪師書 一卷

禪苑清規 一卷

觀物初錄 一卷

季潭全室集 一卷

瀑泉集 一卷

等數十百部に上る。此外に五山版の經史詩文類があるのは非佛書として別に擧げる。

準五山版の師練虎關著「元亨釋書」三十卷は最も大部のもので、一般の語録と異り、日本人の僧傳を日本人が書いたものとして著明である。師練三十歳の頃鎌倉に往き建長寺にて專一山に面會、日本名僧の事を問はれし時史傳に暗く明答する能はざりしより大に發憤し「釋書」編述を思立つたと云ふ。開板については朝廷より近江國某地の田地を下賜あつて費用に充てたと云ふ。相當大事業であつた譯である。是は勅旨によつて大藏經に入れられた程である。其題辭は次の如くである。

大日本國延文庚子六月有旨入毘廬大藏、海藏院寓居比丘單況等謹募衆緣、恭爲

今上皇帝祝延聖壽、文武官僚資崇祿位、國泰民安命、二鏤梓與大藏經印版共一部

計三十卷 時貞治三年甲辰正月 日謹題

五山版は大抵後年江戸時代に於て覆刊されて居る。初期には活版、後には整版で。

第三節 非佛書刊本

前述の如く佛書の刊行より遙に後れて非佛書の刊行が起つた。其最先のものは、元亨二年の

古文尙書孔氏傳 十三卷 三輪僧素慶跋

と稱せられるが、その現存本は所在不明であるので、聊か信を置き難い。次の者で現存するものは

詩人玉屑 一冊 正中元刊、洗心子玄惠刊、五山版

次に

寒山詩 二冊 正中二刊、禪尼宗澤刊、五山版

五山の出刊にかゝる非佛書は甚だ多いが、概ね詩文、字書の類に屬する。

詩文書類は一般に風雅のものであるから、版式も自ら佳で字體も端麗な傾があつて、佛書の五山版より美しいと謂はれる。經史類は左までに無い。主なるものを舉げると

詩文及詩作書類

重刊貞和類聚祖苑聯芳集 五卷

嘉慶二年周信刊(義堂)

本書重刊とあるは此刊行以前に貞和年間詩僧義堂周信(即ち同じ著者)が一本を著して童蒙の便に供せんとて、宋元僧侶の詩を輯めて置いたが、其未定稿は延文三年(二〇一八)に火事があつて其稿本が焼失してから、不正本が寫傳されたのを慨き、前書に大增補を加へて三千首を收め、今の題に改めて版行したと云ふ事は周信(天龍寺僧)の跋文に見える。

范德機詩集 七卷 延文六刊、五山版

空華外集 十卷 貞治七刊、圓月跋(義堂外集)、五山版

白氏文集 七十一卷 應安六年、永和元年の讖語、刻工王林、五山版

北澗文集 十九卷 五山版

中州樂府 一卷 五山版

藏叟摘稿 二卷 五山版

唐朝四賢精詩 四卷 五山版

皇元風雅 十二卷 五山版

新芳薩天錫雜詩選稿全集 一卷 五山版

蕉堅稿 三卷 有名の詩僧絶海の詩集、五山版

禪儀外文集 二卷 支那彫工の刻、五山版

鐔津文集 二十卷 五山版

雪峯空和尚外集 一名東山外集 一卷 貞和三(丁亥)梵僊跋、五山版

鈍鐵集 一卷 建長寺永鑑跋、五山版

全室外集 一卷 五山版

冷齋夜話 十卷 五山版

早林集 一卷 應永二十九(壬寅)周崇跋、五山版

集千家
註批點 杜工部詩集 二十卷 覆元版、五山版

王狀元集
百家注分類 東坡集 二十五卷 五山版

山谷詩集注 十一卷 支那彫工の刻、五山版

魁本大字諸儒箋解古文眞寶 大字本の種、五山版
小字本の種、五山版

増注唐賢絶句三體詩法 三卷 四版あり。準五山版

(1) 明應版(三年の原版)

(2) 明應版本にして應仁元年京師の戦亂に散失したるもの多きを慨き更に影版したるもの、葉菓子跋。

(3) 明應版の覆刊、年代不詳。

(4) 訓點ある本、年代不詳。

此中(3)の版木流傳して和泉の堺に來たのを堺の富醫阿佐井野宗禎が求めて家塾に納れて、印行したものが傳存。宗禎は有名の婦人科醫であつたと云ふ。

詩學大成 三十卷 五山版

詩學評點 二十卷 五山版

唐宋聯珠詩格 二十卷 五山版

新刊五百家註音辨唐柳先生文集 十四卷 元中四年(嘉慶元年)刊、俞良甫版

唐柳先生文集の跋に

祖在唐山福州境界、福建行省興化路肅、田縣仁德里臺諫坊住人、俞良甫久住

日本京城阜近、幾年勞歲次丁卯仲秋即題

とある。

五百家註音辨昌黎先生文集 二十卷 俞良甫版

韻學書及字書類

新編排韻增廣事類氏族大全 十卷 明德四刊、五山版

古今韻會舉要 十卷 應永五、聖壽一周刊、五山版

韻府羣玉 二十卷 五山版

增修互註禮部韻略 五卷 (日本永春刀)、五山版

聚分韻略 五卷 數版あり。五山版

(1) 應永十九、京都靈元院刊

(2) 文明十三(辛丑)、薩陽和泉莊宗藝刊

(3) 文明十八、濃之南、豊大機刊

(4) 明應二(癸丑)、周陽真樂軒刊

(5) 永正元、東山春雲軒刊(教海)

(6) 享祿三、日陽真幸院刊

(7) 三重韻(大内版) 天文八、大内版、義隆跋

(8) 天澤寺版 天文二十三、駿河富士山善得寺樂全軒刊

本書永正元年版教海の跋に

聚分韻略啓童蒙之書也、然平上去入、人難卒分之、或列四聲以備一目、蓋俾人易解也、因鑲于板、置諸東山春雲軒、伏冀不即文字、不離文

字、以極禪河、教海

以て此書當時流行の様を窺ふべし。其外無刊年ものが數回出版されて居る。

韻鏡 一卷 享祿元、清原宣賢刊跋

同 永祿七刊

漢和字對照のもの

節用集 二卷 饅頭屋本(奈良林氏宗二刊)

同 天正十八年、堺石部了冊刊

同 易林本、慶長二、易林刊

「洛陽七條寺内平井勝左衛門休與開板」

同 慶長版にて三種ある。

(1) 慶長十五、壽閑刊

(2) 同 小山仁右衛門永次刊

(3) 同十六、「烏丸通二條二町上之町刊之」

第三節 非佛書刊本

節用集 元和五、源太郎刊

大廣益會玉篇 五卷 慶長九、宗純跋

玉篇 三卷 慶長十、夢海跋

同 東井叟云朔刊

倭玉篇 三卷 同十五、「於洛陽二條通二王門町開板」

儒書、經史類、雜書

春秋經傳集解 十五卷 兪良甫版

毛詩 二十卷 五山版

音注孟子 十四卷 覆宋版の優秀のもの、五山版

論語 二十卷 正平版、三種(三版とも異版)

(1) 「堺浦道祐居士重新命工鏤梓

正平 甲辰五月吉日謹誌」

(單跋本)

(2) 「堺浦道祐居士重新命工鏤梓

正平 甲辰五月吉日謹誌

(二跋本)

學古神德楷法「日下逸人貫書」

(3) 無跋本

此正平版「論語」十卷此間に在りて版式の甚だ殊なる一書で、五山版式では無い。此頃舶來の新本などを覆刊したのではなく、遠く支那六朝時代の石經の論語を母本とし、文字もそれに相應した古代の書體を用ゐた。即ち二跋本の第二跋にある古神徳の楷法に倣つて書いたと云ふ通り、奈良時代の寫經生神徳の字を學んだ程に用意周到のものである。論語は支那の書でも正平本の出版には本邦人の力が大に加つて居る。

三本あることは古來學者間に分つて居たが、多くは版木は同一で、單に單跋のもの、二跋のもの、無跋のものと跋の多少有無の差とするやうであつた。然るに今三本を對照して見ると三部各々別々の版で、文字の肥瘠其他に其證が歴々として居る。それにしても此三部出版の先後が如何あつたかと云ふ疑は残るが、案ずるに文字の書寫者の事を一行加へたのが先であるかの

如く考へられる。此は最初出版の際に特に用意のあることを断るのが當然であるからである。「學古神德楷法日下逸人貫書」とある日下逸人は正平十九年より四十年前の一書に跋文を書いて居るから、其年代から推して最先に二跋本が現れたものとする根據がある。然るに單跋本を二跋の原本から覆刻するに當つて、字形も多少眞より遠つたので、特に此一行を削り、單跋にしてしまつたものらしい。更に無跋本は覆刊のもので原の二跋本からは縁も遠くなつたので、跋の初の方も後の方も全く削去つたのらしい。版式も文字も二跋本は最も整つて居る。二跋本の巻尾に「論語卷第十」とあるべきを「論語」と誤刻したのが、單跋無跋の兩本には訂正されてある。此も二跋本に不用意に過つたのを後に手を入れた證であらう。然るに江戸時代の學者市野迷菴（光彦）は「正平本論語札語」を著して、單跋本が第一、無跋本が第二、二跋本が第三で前二者の影本であると云ふ斷案を下した。此は甚だ不穩當の言で、三部とも相追うて出版され、其文字書法は大同小異であるのに、最後と云ふ二跋本に於て特に筆者について「學古神德楷法云々」の能書きを加へると云ふは可笑しな譯である。後出になる程初本の形を多少替へて我より先だつ本のある事を曖昧にするのが自然の人情であらう。兎に角最後の一版に至つて書者の註を附することが信じ得られぬのである。文字の精否についても二跋本は原本たるの價

がある。他の二本は摹影の氣が見える。古神德云々は正倉院文書の中に寫經生の一人として神德の名があるのである。

論	語	二十卷	明應八、西周平武道刊
論	語	二十卷	天文二、清原宣賢跋
大	學	一卷	「泉南堺の阿佐井野氏刊」 文明十三、伊地知重貞鹿兒島刊
同			延徳四、桂樹院再刊
蒙	求	三卷	五山版
分類合璧圖像句解君臣故事		二卷	五山版
唐才子傳		十卷	五山版
立齋先生標題解注音釋十八史略		七卷	五山版
歷代帝王紹運圖		一卷	五山版
歷代序略		一卷	天文二十三、龍山雪齋書院刊

醫書大全 十卷 大永八、阿佐井野宗瑞刊

本邦刊本醫書の始と云ふ。元版の覆刊

御成敗式目 一卷 享祿二、槻宿禰伊治跋

貞永式目刊本の始か。

實語教 一卷 合一卷 明應六、藤千代麻呂跋

童子教 一卷

釋文千字文注 一卷 五山版

四體千字文 一卷 天文十九、日州田島莊弓削交雲刊

四體千字文書法 一卷 天正二、堺石部了冊刊

此時代の漢詩文及經籍儒書類は宋元明版の覆刻に屬するが故に、版式等すべて支那の法式のまゝなれど、本邦人の著述に係る書にして漢文のものは、支那本に倣つて和臭の少いものが多い。例へば重刊貞和類聚祖苑聯芳集(周信義堂撰)の如きが好例である。(本書は初め新撰貞和集と題して未刊で行はれたを後に補訂して今題にしたのである事は前述の如くである)

儒書の「音註孟子」(五山版)も支那宋本の覆刊なれど刻様の宜しさもの、一である。此書は其後本國支那に亡びて了つたもの、仍て近頃羅振玉が之を翻刻した。

五山版が應永以後漸く其數を減じたが、應仁の亂以後は殊に衰態を現じた。之に反して京都を遠く離れた九州の薩摩、日向乃至周防又稍と近くでは和泉の堺などから種々の出版物を産することになつた様子が分る。薩摩、日向邊は上國の争亂中に徐々に文學の曙光を見、殊に儒學の勃興と共に「大學章句」などを出した。朱子新注本開版の最先鞭を著けた。文明版と延徳版とが鹿兒島に刊行された。「聚分韻略」(文明版)は幾多の版のある中で薩摩版がある。別に日向眞幸院版の一部もある。

周防(大内氏の封域)の出版物は多數に在つたやうに噂されて居るが、現代に傳はつた者は少い。「聚分韻略」には明應版(大本)と天文版(小本)がある。天文版には

太宰大貳兼兵部大輔周防介多々良朝臣義隆

の跋が添うて居る。世に大内版の「聚分韻略」として名高い。此外に大内版の「十八史略」の傳へもある。西周の出版の明應版「論語」があるが、此は正平版の覆刊である。新に略字を用

むたり、誤寫も少々ある。

和泉堺の開版は

正平版論語

(三部ともか、少くとも二跋、單跋の兩本)

等を除くと、

唐賢三體詩法

醫書大全

論語

(南宋本)

等、阿佐井野家の努力に成る。殊に「醫書大全」については、高僧幻雲壽桂の跋がある。阿佐井野宗瑞の志の厚いことが是でよく盡される。即ち

吾邦以儒釋書、鏤板者、往々有焉、未嘗及醫方惠民之澤、人皆爲鮮、近世醫書大全自大明來、固醫家至寶也、所憾其本稍少、欲見而未見者多矣、泉南阿佐井野宗瑞、捨財刊行、彼明本有三寫之謬、今就諸家考本、方以正斤兩、雖一毫髮、私不增損、蓋宗瑞之志、不爲利、而在救濟天下人、偉哉陰德之報、永及子孫矣

大永八年戊子七月吉日

幻雲壽桂誌

(蓮仁寺住、號月舟、天文二跋)

天文版「論語」は初め別人の作つた版本が堺に流傳して來たのを、阿佐井野氏が購求して家塾に置き求める人があるのに應じて印刷して譲つたらしい。後に堺の南宗寺に移藏せられたので、世に南宗寺論語と稱する。此版本今猶南宗寺に存す。近年之を刷つて有志者に買はせたことがある。今昭和四年より四百七年前の版本が餘り甚しく磨損せず存する。

さて是迄の刊本は漢文を學ぶ者に非ざれば用の無いもののみであつたが、戰國時代に近づくに従つて、民衆向の書物が刊行の機を得るやうになつた。即ち千字文や節用集の出版である。此は文教史上大に注目すべきことである。學者や僧侶のみの學問に資する書物ばかりでは不可と云ふ觀念が一般に起つて來たのである。

千字文書法や節用集も堺版が古いのであるけれど、此等は阿佐井野家に關係無く「泉州大島郡堺南庄石屋町經師屋有是石部了冊」の所刊である。經師屋とあるのは、五山版盛行の餘波である様分る。製本業に直接親密の關係のある經師職(佛經裝潢師)が書物出版に従事した當時の情況が窺はれる。「節用集」は後世に互つて屢々發行される一種の辭書の總類名になつた。江戸時代に入つても數部刊行された。

足利時代後期に「聚分韻略」の頻々刊出された事は、主として僧侶の作詩作文の爲の參考書

の必要ありしによるのであらう。天文二十三年駿河天澤寺刊行の一部など地方版として出たものを見て、本書の需要の廣かつた様が察せられる。

足利氏の末期に近づくに従つて、僧侶の詩文を事とする者多くなるや、支那の詩の模範的なものを集めて極てハンデーなる「三體詩」のもてはやさるゝ風を生じ、是に於て本書は數版の刊書を促された。其沿革の概要を擧げると

- 1 明應版の原となつた本（應仁の亂以前刊行）
- 2 明應版（明應甲寅葉集子版）
- 3 明應版を用ひて後刷、阿佐井野宗禎其版本を家藏として印行したもの
- 4 2の明應版に訓點（假名）を附したもの
- 5 活字版 二種

甲 卷頭の一首、従前の整版と半を異にするもの

乙 従前の整版本と同文のもの

となる。

足利氏時代は戰亂相次ぎ、僧侶の外には悠々學問に遊ぶ者は殆ど有り得なかつたかの如く想

像され、亦此間に俗界に文學を以て立つ人も事實無かつたのであるが、其初京都に於ける五山などの書籍刊行が盛であつた餘波が應仁の亂以後になると次第に地方に其影響を現はし、ボツボツながらも本邦の刊書事業は滅絶に至らず、其時々宜しきに應じ多數者の需要に随つて諸種の書籍の出版を見たことは前述によつて大凡を知ることが出来よう。而も始は支那の書物の覆刊重刊のみであつたが、何時となく日本民衆の教育教化に資するやうな本が出版されるやうになつて居る。若し此時代が全く無かつたならば即ち五山版や其餘風を受けた刊書事業が絶無であつたならば、徳川時代に入つて直ちにあれだけの文學復興を見ることがむつかしかつたらう。朝廷や家康其他有力者の活版熱が突然起るやうはあるまい。皆前時代に於て命脈を傳へ來つた書物の繼續事業の如き状態で活版事業を起されたので、慶長寛永間の活版本は半は五山版などの再刊摸版と看做されるのである。此見地に於て足利期の刊書は甚だ後代の文運復興に寄與する所があると謂へる。

第四節 古活字版時代

木版術の不便を感じた國民が種々攻究苦心の後に活版術を發見するに至る例は歐洲や支那に求められる。然るに我國では從來久しく整版を以て唯一の出版法とし、此法以外に便法の在ることに想到らずして遂に幾百年を経過した。

尤も活版術の存在することは室町期の際に稍々盛んに朝鮮から舶來した彼の國の書籍を見て知つたことであらう。假令多數の人は朝鮮で永樂宣德年間（我が應永永享に當る）に鑄字版で漢籍や朝鮮の著述を刊行して居た事實に氣が付かずにあつたらうが、極めて少數の文人學者たちは一般の刊書と版式を異にした書物の様子を熟覽して、彼の國には一種の刊書法が行はれて居ることに著想したことであらう。處が活字を造る程に書物の刊行が盛んで無く、謂はゞ物好の人が書物を刊するに止まつた間は、多少の工夫を費して新案を出さうとする動機も無い譯である。日本人が歐洲人のやうに手先の仕事が鈍かつて、整版即ち木版術 (block printing) などを極端に厭つたならば、我國に於ける活版術の流行は餘程早めに始まつたであらう。

併し日本人は全く好奇心を缺いた國民では無かつた。一たび或機會に於て活版本の多數及び活字の現品を目撃するや、遽に其新奇にして便利なることを感じて、急に外國の鑿に倣はうとした。其機會と云ふのは豊臣秀吉によつて行はれた文祿年間の征韓役である。浮田秀家を總大將として我軍の諸將の手で朝鮮の土産物が種々鹵獲されて本國に送致された。その中に韓本の活字版物も少からずあり、其上彼國で此等の上印に使用した銅製活字（鑄字）も多數にあつた。そこで自然に此等の品に著目した文人等もあつた中に、曾て關白秀次に近侍して居た小瀬甫庵（道喜）等の操觚者があつた。時に甫庵は既に秀次の許を離れて京都西洞院勘解由小路で私塾やうの家を持つて兒童等に教授して居た。其教科書として用ゐる必要が有つたものと見えて、「補註蒙求」を刊行するに方り、大に新しがつて之を活版で印行した。即ち有名なる

新刊徐狀元補註蒙求 上下二卷

で、卷末に

惟時文祿第五丙申小春吉辰道喜記

の跋文のある本である。日本の活字本として動かすべからざる確證の備はつて居るものは此ものが最初であらう。而もそれは市井の一處士の仕事である。此點に於て小瀬道喜の名は其著述

の「甫庵太閤記」よりも不朽であらう。

甫庵は民間に在つて活版本を奨励した私人の随一人者である。此後（翌年）

慶長二年に 新編醫學正傳

同十六七年頃に 年代紀略

を出して居る。此人には別に

太 閤 記

信 長 記

等の名著がある。秀次の後に堀尾吉晴に仕へ、後前田氏に招かれ、寛永七年七十七歳にて歿した。「信長記」は後寛永中に活印された。「太閤記」は永く寫本で行はれた。甫庵の後裔は醫者として前田家（加賀藩）に永く事へたと云ふ。

此蒙求と殆ど同一時、否寧ろ一年前に出た即ち

文祿四乙未曆極月二十四日

大光山本國寺常住 願主一輪坊日保

の奥書（印版）ある

法華私記縁起 一帖

が活刷されて居る。此は百部を作つて何處ぞの寺（或は自己の寺即ち本國寺）に寄進したものである。従つて當時世間には出ず私刊同様のものである。仍て前の「蒙求」程には世に知られず、又世益をなしても居らぬ。但し時代の點に於て一年許り先出したのである。

文祿年間の活版本は今の處では此二部に止まる。此二部は猶征韓役の訖らぬ間の出版で、謂はゞ古活版の先驅である。

然るに次の慶長年代に入ると、朝鮮の活字印刷法が廣く知れ互つて來た。其中でも第一著に之を學ばれたのは當時の朝廷（後陽成天皇）であつたのは頗る興味ある事である。

さて 後陽成天皇勅版の最初は文祿二年の「古文孝經」であるとの説あるが、惜いことに其印本後世に傳はらざるにより慶長二年の「勸學文」「錦繡段」を初とする。但し文祿二年「古文孝經」刊行の事であつた事實の證據には「時慶卿記」に

文祿二年閏九月廿一日、廿二日、廿三日、廿四日、十一月六日、十六日、十二月八日、十三日

に所出、十二月十三日の條には

御前御酒あり、各御人數に印本被下、六條と某計は先日拜領也

とある。前記連日の間の記事は文選、植字、校合等出版の功程に係る事である。刊本を關係の諸官員に下賜の事が歴々と記されてある所を見ると、儘に出版が了つたに相違無い。しかし同じ「古文孝經」が後の慶長四年に勅版になつて居るのを見ると、文祿二年版には誤謬などがあつて、而も創刊の際として頒行も狭範圍であつた所から後に召上げなどになり、爲に其本が今日に残らぬのではあるまいか。要之に文祿版は疑問になつて居る。文祿版に反して慶長四年版は現に見られるのである。因に云ふ 後陽成天皇は學問に御熱心で當時の經學者舟橋秀賢（文章博士）を寵遇になつて帝王學に關する御研究を遊ばされ、暇あれば讀書に従はれた。元和三年八月崩御の時、中院通村が其日記に「御年四十七、可悲可惜、和漢御才、爲四海爲公私、如火滅」と悼んで居る。

前記の如く 後陽成天皇の勅版は

慶長第二歲在丁夷則下濟

臣僧南禪靈三

の跋文ある

新刊錦繡段 一卷

を第一とする。跋の全文に

布諸一版一紙、纔改某布、則渠祿（錄の誤）亦莫不適用、此規模頃出朝鮮、傳達天聽、乃依彼様、使工摹寫焉、叡思辱在擬周詩六義教以化之、家藏人誦傳之不朽云

とある通り、範を朝鮮に取つたことが明に記されて居る。日本人の創意で無いことは之で知られる。此頃とあるのは此術を儘に知つたのが此役（文祿）によつてからである意と視られる。實は此頃より既に二百年以上の前代から朝鮮では行はれて居たのであるが、そんな事状は分らなかつたのである。本書功成りしは此年八月で、二十日に諸臣に下賜された。同年（慶長二年）の勅版に

勸學文 一卷

がある。跋文に

命工每一梓鏤一字、基布之一版印之、此法出朝鮮、甚無不便、因茲摸寫此書

とある如く、是にも朝鮮傳來の法を摸すとある。又「一梓毎に一字を鏤して之を一板に基布す」とある事から當時活版を一字版と稱した。

前二書で勅版の口火が切られた。短篇もので試験を了へて、是から比較的大部の書に取掛る事になった。即ち中一年を隔てた慶長四年には

日本書紀 神代卷 二卷

慶長己亥姑洗吉辰

正四位下行少納言兼侍從臣清原朝臣國賢

の跋文あるものが出た。所謂慶長版日本紀である。跋文中に

欽惟

陛下寛惠叡智之餘、後世惜其流布之不廣、

遂命鳩工、於是始壽諸梓矣

の語があるのは勅版たるの證である。本書は三十巻續刊の叡慮であつたらうが、餘りに大部であつたので、神代紀のみに終つたのは残念である。是には西洞院時慶等が従事したやうに思はれる。出版成るや直に伊勢皇大神宮内外宮に各一本を奉獻、のち侍臣等に頒賜せられた。「御

湯殿上日記」の慶長四年閏三月三日の條に

日ほんぎ新ばんに仰つけられ候けふいできたて、みなくへ下さるゝ

同記三月五日の條に

今日日本紀いせないくう外くうへ爲參るてんそうしていたさるゝ

とある。

同じ年（慶長四年）に論語、孟子、大學、中庸の四書と孝經とが勅版された。此四書、孝經は慥に儒學を復興の聖旨から出版を促されたのである。刊記は無いが每部巻頭見返しに

論語慶長
己亥刊行

の如き大文字の印刷が添はつて居る。全體が大字の佳本で、如何にも王者の出版と首肯される。八行十七字である。

四書 十冊
古文孝經 一冊

四書、孝經の出版につきましては慶長四年五月廿五日同記に

四しよきやうきやう新ばんに仰つけられていでき、御前のおとこたちになまふとある。次に同じ年に

職原抄 二卷

が出た。是には四書、孝經の如き見返しの文字は無いが、卷末に

職原抄慶長己亥季夏刊

の附記がある。文字は他の楷書と異つて篆書である。

以上數部の勅版中「錦繡段」「勸學文」の二部は天子が宮中に部室を定められ、昵近の公卿數名に命じて字を選び、版に植ゑて印刷せしめられたものと思し。參議西洞院時慶卿も其從事者の一人であつた。其他四書以下は宮中御手狹で別所に持出し活字其外は既製のものを以て印刷せしめられたことであらう。随つて跋文が無い譯でもあらう。費用は凡て朝廷から出されたに違ひ無し。

處で勅版の活字は凡て銅製で所謂鑄字であつた。それは朝鮮の活字を其まゝ學ばれての事である。之に反して甫庵の「蒙求」や僧日保の「法華私記緣起」「法華玄義序」の活字は民間無資者の事であるから木製の物である。是は各々の印刷様態で知れる。宮中使用する銅活字を造るには多大の費用がかゝつたであらうが、當時の皇室式微の際よくも此かる事業を思召し立たれたものと敬畏に堪へぬ次第である。後陽成聖帝が文教を大切に思はれた程を深く深く感銘せねばならぬ。

勅版は此外に無跋無刊記の

長恨歌及琵琶行 合綴

慶長八、九年の勅刊か。

五 妃 曲

本書の刊行は慶長八年三月頃か。「山科言繼卿記」慶長八年「四月一日丁亥晴、禁中より白氏五妃曲、上陽人李夫人陵園妾長恨歌傳王昭君等也、一冊被拜領了、忝者也」

陰 虛 本 病

實物不傳、「古文故事」に原勅板覆刊の整版本を見しこと出づ。勅版ありし事は事實ならん。本の六張の短篇。「醫學正傳」の要條を抜萃。但し醫學に對する聖旨の所在は可敬服。

などもあると傳へて居るが、審で無い。或は宮中なり宮外なりでの刊行にしても別段御聲が、りのあつたものでなくして、公卿等が自分の心得で作つたものかと察せられる。尙此等は後世に所傳の本が至つて少く殆ど無いのも不思議である。「時慶卿記」に文祿二年十二月八日近臣に願與あらせられたと云ふ記事があるのは疑はしい。勅版の銅活字は朝鮮から鹵獲の品を直に使用せられたものとの説もあるが、未だ確傳を得ぬ。

德川家康の活字版事業

以上は市版にしても勅版にしても京都の出版であるが、之に衝動せられて關東の武家でも活

字版を出すことになつた。其率先者は德川家康其人である。是より先家康は文教を以て國を興し兵事氣分を一掃せんとする志があつて、慶長に入る頃から京都より五山の僧を招き又公卿の歌學者等と呼んで和漢の學を講ぜしめ、又古來の逸書を集める事に苦心し、金澤文庫の藏書其他公家、寺社、舊家の藏書を寫し、或は之を手に入れ之を駿府の文庫に入れて保存した。後に江戸城内の富士見の文庫、それから楓山の文庫に移した。書籍の出版の大切な事に著想したのも古書の採訪蒐集によき程の經驗を有ち相當の興味を得てからの事である。家康が織田、豊臣二氏と違つた方面からも政治をしようとして著眼したのは偉い所である。前二氏は武力一點ばかりであつたが、家康は文事を以て人心を收めようとした。爲に並々の覇者と選を異にする所が窺はれる。但し信長秀吉のあらごなしの了つた後に出たのが、特に幸福であつたのは勿論である。集書の初に採訪し得たものは律令、令義解、侍中羣要抄、故實抄、左氏傳、舊事記、古事記、六國史、類聚國史、弘仁貞觀延喜格式、百練抄、江家次第、政事要略、姓氏錄、古語拾遺、本朝文粹等の古典又は宋元版の書である。家康は百方採集の書を京都の五山等の僧侶の筆書に巧なる者を二條城に集めて謄本三部を作らせ、一部を禁中に納め、他の二部を駿府文庫、江戸城文庫に入れ、古書の廢殘を防ぎ新政府の諸法度制定の料とした。圖書の蒐集には金地院（南禪

寺)の崇傳(本光國師)、林羅山の力が最も多い。寫本の僧は數十人の多きに及び、崇傳の董督下に公家の古記録の謄寫に力めた。

(一) 孔子家語 四卷四冊 慶長四年刊

跋

世際季運、而學校教將廢也、維時内府家康公、于武得其名、故興廢繼絶、爲後學刻梓文字數十萬、而賜予、退爲謝公之恩惠、初開家語、此書是聖人奧義、治世之要文、寔非小補也、刊字列盤中、則明本家語、以數本考正焉、或板行有訛謬、或文字有顛倒、以亡加之、以餘刪之、雖如此、有帝虎鸚鵡誤者必矣、只願待博雅君子改制焉也、謹跋

慶長第四龍集己亥仲夏吉辰

前學校三要野衲於城南伏見里書焉

慈眼刊之

(二) 三略 一冊 慶長四年刊

(三) 六韜 二冊 慶長四年刊

跋

維時内府家康公、以刊字數十萬賜予、即開六韜、六韜是文武備書也、吾公治世不忘亂謂乎、慶長四龍集己亥仲夏吉辰梓焉、板行誤以明本講義改正者也、于時慶長四龍集己亥仲夏吉辰、庠主三要野衲書之

(四) 三略 一冊 慶長五年刊

跋

右三略依征夷大將軍家康公命、刻梓焉、版行誤以講直兩部改正者也、于時慶長五龍集庚子夏吉辰前龍山元信叟於伏見城下書焉

(五) 貞觀政要 十卷八冊

跋

唐太宗文皇帝者、創業守成、一代英武之賢君也、千載之下、仰其德慕其風者、今之内大臣家康公是也、故今前學校三要老禪、校訂貞觀政要、去歲開家語於板、今歲刻政要於梓、迺聖賢前軌、而作國家治要、宜也豐國大明神、降辭下土之日、受命嗣秀賴幼君賢佐遺命、爾來寬厚而愛人、聰明而治衆、不異周勃霍光安劉氏輔昭帝也、矧又海內弘此書、而協和士民之心、則爲明神不忘舊盟、爲幼君盡至忠者、其用大矣哉、慶長五年星輯庚子花朝節、前龍山見鹿苑承兌叟謹誌、慈眼久德刊之

右に見る如く何れも内府家康公の命を受けて奉行の意を含ませてある。「孔子家語」の跋にある前學校とは三要元佑もと下野足利學校の校主たりし故である。城南は山城南部即ち伏見町の所在。最後一行の慈眼は活字を取揃へて印刷した僧體の職人である。所謂佛師の一人で、五山時代以來刊書に方りて整版彫刻及印刷の事に當るのは佛師職の者に限られたので、活字版を

出すにも僧が従事した。監督者が僧三要であるから一段相應して居る。本書に限らず慶長元和頃の古活版には植字印刷者に僧侶の名が署せられてゐるのは珍らしくない。

次に前記跋文中にある通り、家康が活字數十萬を製したとは木字であつて、勅版活字の銅製であるとは違ふ。此銅字は朝鮮のものを直に使用したものと説があるが、家康は手取早く木字を作つて三要に與へたのである。木字は活字としては最幼稚の種類で、朝鮮でも初は木版又は泥製の時もあつたが、此頃は悉く鑄銅字であつたから、日本では活字の原始時代に遡つて新製した譯である。

「六韜」の跋に「六韜是文武備書也、吾公治世不忘亂謂乎」とあり、「治世不忘亂謂乎」とあるけれど、家康は表面に鋭鋒を潜めて居たが、心中には深く圖る所があり、此年の翌年には關ヶ原の大戦が起る程で、決して治世では無い。他日武家の大將軍となるには兵法の心得が必要である處から、六韜三略などの兵書を刊行したものと見える。第四の「貞觀政要」も他日覇府を開いて天下の政治を掌握する時の準備として帝王學の研究に没頭して居たことの表徴とも視られる。

かくて關ヶ原役の後は家康も經營多端の爲に四五年刊書に手を著けなかつたが、慶長九年に

至て復び三要をして活版事業を起させ、又

三 略 一冊 慶長九年刊

周 易 六卷六冊 慶長十年刊

を出した。

此兩書にも跋文（三要撰）があるが、「三略」の分は短く、「周易」の分は長文であるが、此時は家康の事を征夷大將軍家康公の命に依て刊行の語を加へて居る。引續いて

(一) 東 鑑 五十二卷三十冊 慶長十年刊

跋

夫、人之處世也、言行之善不善、不可不記焉、得一善記之、則百世善其人、得一惡記之、則百世惡其人、言行寔君子樞機也、可不慎乎、左氏春秋、而作萬代之龜鑑、得良史名者難矣哉、東鑑一書者、自治承四年至文永三年、八十七載之間、傍羅曲探、以大抵記之、不知記者名爲遺憾、久歷年代、其名湮滅耶、深隱山林、其名埋沒耶、抑又謙退

以不著其名耶、見此書、則言行之美惡如指掌也、吾大將軍源家康公、治世之暇、翫弄此書、見善思齊焉、見不善內自省也、凡人主之所趨向、天下隨之、如風草形影也、以東鑑名之者、非無由、殷以夏爲鑑、周以殷爲鑑、詩曰殷鑑不遠在夏后、今也刻梓以壽其傳、後世能先此書、辨別淄澠、則非管東州明鑑、豈不作四方鑑戒乎、書之以爲跋、慶長十稔星集乙巳春三月日、前龍山見鹿苑承兌叟

(二) 周易古註 六卷六冊 慶長十年夏刊

跋

古今學儒書者、排斥佛經、學佛經者、排斥儒書、是世之常、而共不辨真理也、釋尊生中國設教、則如周孔、周孔生西天設教、則如釋尊、儒釋元來不涉二途、如鳥兩翼、似車兩輪也、如閑室大禪師者、壯歲入東關、讀四書六經、而品論之、講說之、既稱學校者有年于茲、暮齡到洛陽、傳中峯法要、位空門極品、僉曰儒釋兼拜也、頃

蒙大將軍源家康公鈞命、印行周易、其志要弘聖道於萬年、能校正舛差、而加陸德明音義於王輔嗣注、集而大成者乎、古德曰、鸞嶺拈華、伏羲初畫、少林面壁、文王重爻、然則於禪門、亦不可不究盡易道、予於禪師、其情如骨肉、因需跋其後、不獲固辭、謾書焉也、慶長十年星集乙巳孟夏初五日、鹿苑西笑叟承兌

(三) 七

書 二十七卷七冊 慶長十一年刊

跋末

慶長十一龍集丙午初秋念又一日紫陽閑室元信叟書焉

を刊行した。

以上元信開版の活字は圓光寺活字（伏見版活字）と云ふ。圓光寺は元信の後嗣が京都にて徳川家より賜はつた一乗寺村の寺で今尼院として存す。元信在住の時は學校として僧俗の入學を許した。家康の命で元信が師範となつた。但し圓光寺は是より先伏見に在つて、後京の相國寺

内に移り、寛文七年徳川氏より一乗寺村の地を下賜、朱印二百石を附與と云ふ。今同寺に活字の残存がある。

又約十年休んで

大藏經一覽集 十一卷十一冊 慶長二十年刊

を出した。是は幕府の建立に當つて天海僧正が大に盡力したが、其天海が明版の本を家康に示して公刊について請ふ所があるに任せて、官費を以て刊行させたもので、家康は各大寺に一部づゝ頒つたら利益があらうと謂つたさうである。さて此度は木活字の久しきに堪へぬことを覺つて大仕事ではあるが、朝鮮のやうに銅字を以てしようと思ひ朝鮮より分捕の活字の不足を補ふ爲に大小二様の銅字を新に鑄造させた。それには文字の知識ある者を要するので特に京都から五山の僧侶や職人まで召寄せて大規模の役所を作り、董督には例の林道春、崇傳（金地院）、三要の嗣法寒松などを置いて従事させた。此序に帝王學の參考書とも謂ふべき

羣書治要 四十七卷四十七冊 元和二年刊

を同じ銅活字を以て刊出させた。然るに家康は其本の成るを見るに先だつて死んだ。それ故印刷した本も配付されるに至らず、出來上りのまゝ、駿府の藏に納まつてあつた。後には江戸楓山

文庫に移された。但し此書は早く故國支那に亡び、日本に夙に傳はつて金澤文庫本などが頗る大切なものになり、それを母本として此度覆刊したのである。支那に逸した書を本朝で公刊した事は文獻史上に特筆すべきである。併し昔日本に傳はつた時から既に五十卷の完本は無く、三卷を逸して四十七卷になつて居たことは残念であるが、此は致し方も無い。後年此元和活字本を覆刊したものが、若干部支那に渡つて大に好學の人を嬉しがらせた。是は一佳話で日本人が鼻を高くし得ることである。

右「大藏一覽集」「羣書治要」刷立の様子は「御本日記」等を援いて近藤守重の「右文故事」に詳述されてある。徳川幕府の活版事業は初祖家康一代に止まつて、元和二年以後は全く休止になつた。此事だけでも如何に家康が治道に心を注いだかが判る。創業の人の價値は此う云ふ處にもある。

後水尾天皇の勅版

元和の聖主 後水尾天皇は御父 後陽成天皇の遺志を承け給ひて只一部ではあるが、やゝ大

部の

皇朝類苑 七十九卷十五冊

を活印された。正しくは「皇宋事實類苑」と題した書で宋人江少虞所撰である。此活版本は宋版本を本としたもの、元和七年六月晦日前南禪寺僧瑞保の長跋があつて、天皇の叡思を極稱して居る。是も銅活字で古活版本中最も精巧の出来である。

此頃の印行本は活版整版に拘らず印刷部数は極めて少いものであるが、勅版活字本は殊に僅少部数で恐らくは多くて五十部位であつたらしい。固り賣品の性質で無く、思召のある向、有数の廷臣や幕府などに一部づゝ頒贈されたに止まる。随つて後世に傳存するものが稀である。「皇朝類苑」の勅版成るや、其一部を京都所司代板倉重宗（從四位少將周防守）を下し、林道春に命じて朱墨點を加へしめらる。道春即ち脱簡を補ひ誤謬を訂して重宗に返し、重宗より陛下に上る。次で道春亦一本を賜りて家藏とせし趣「羅山文集」に見ゆ。元和七年六月刊行の書に七、八兩月中に加點奉進の由。

此「皇朝類苑」が勅版の最後で、爾後は一部も出なかつた。此に所用の銅活字は寶永頃までは俵に入れて御米倉に藏せられてあり、寶永の大火に焼けたけれど銅製なれば無事にて、其後

取集めて長櫃に收め御文庫に入れられ、時々大學論語などを摺られし由「橘窓自語」(橋本經亮著)に見ゆ。其後活字の成行未詳、案ずるに何時となく散逸したものであらう。

豊臣版及直江版の活字本

徳川家康の活字版に範を取つて二人の武家がやゝ大部の活字本を開行した。其一は豊臣秀頼であつた。

帝 鑑 圖 說 元張居正撰 慶長十一年三月 承兌跋

當時秀頼はまだ幼冲であつたが、承兌の跋文によると

頃右相府秀頼公、及見此書、手之口之、寅夕無不披覽也、仍命工刻于梓、而壽其傳於無窮也

と云つて居る所を見ると、秀頼の意思に出て刊行のやうに思はれるが、實は本人の學問の師たる五山僧などが、曩に家康が「貞觀政要」を出版したのに對抗の意味か何かで、豊臣家でも帝王學の書を刊出したらばなどと申し勸めて出版を起させた事であらう。十三四歳の幼年者が出

版事業を思立ちさうにも見えぬ。併しとにかく慶長十一年に秀頼の仕事として本書が活印された。本書は圖と文とを隔互にした、即ち繪入本である。今一は上杉家の客將直江山城守兼續である。即ち

直江版 文 選 六十卷三十冊 慶長十二年丁未年刊

で、是は兼續の富を以て銅字を作つて印刷した。古版「文選」は數々あるが、就中直江版は整齊の評がある。本書は從來久しく足利學校の宋版「文選」を覆刊したことに誤認されて居たが實は足利本。宋版には卷末に宋人盧欽の跋文が無いのに、直江本に之有るのを見ると兼續が此序のある別本を入手し居りてそれを覆刊したことは争はれぬ。但し直江本を以て寛永九年に重刊した「文選」活字本があるから、それと混じてはならぬ。後本には無界であること及び「寛永九年乙丑孟夏上旬板行畢」と云ふ刊記があることが明に前者即ち眞の直江本(有界)から區別する。此大部物を全部銅字で印行するには非常の費用を要したものであらう。

以上二書の外には武家有力者の刊書は見當らぬ。畢竟資力があつて學問を好んだ武人と云ふ者が滅多に無かつた故であらう。

民間版活字本

曩に小瀬甫庵の活字版「蒙求」が出た後には引續き民間に出版の沙汰が聞えなかつたが、朝廷並に家康の刊行と殆ど並行し、寧ろ此兩者の學問獎勵の主旨に刺戟せられて民間にも活版を以て古典類の覆刊を志す者が出た。然るに古人は其刊本に刊記又跋文を置かざるが多く、果して慶長の出版か元和か寛永かを審定しがたき本が少くない。或は活字の様式等によつて時代を區別する學者もあるが、頗る危険である。

今刊記又は跋文の年紀によつて民間刊出の古活版本を列記すると、凡そ下の如くなる。

元亨釋書 三十卷十冊

慶長四年 洛陽如庵宗乾刊

徒然草壽命院抄 二卷二冊

慶長六年孟冬九日 也足叟素然(中院通勝)跋

孝經 一卷

慶長七年 清原秀賢跋

太平記 四十卷四十冊

慶長八年 富春堂刊

徒然草壽命院抄 二卷二冊

慶長九年 洛陽如庵宗乾刊

沙石集 十卷八冊

慶長十年 圓智校讐

元亨釋書

慶長十年 下村生藏刊

太平記賢愚抄 四十一卷

慶長十二年 醫徳堂刊（以乾三正本刊行）

職原抄 二卷二冊

慶長十三年 清原秀賢跋

五家正宗贊 二卷四冊

慶長十三年 花園一枝軒刊

古文眞寶 十卷二冊

慶長十四年 室町通近江町本屋新七刊

太平記

慶長十四年 存庵跋 才雲刊

太平記 四十卷二十冊

慶長十五年 春枝刊

日本書紀 三十卷三十冊

慶長十五年 野子三白跋

篋篋内傳金烏玉兎集 五卷三冊

慶長十七年九月吉日（刊者名なし）

佛祖歴代通載 二十二卷二十二冊

慶長十七年十二月十九日（刊者名なし）

伊勢物語闕疑抄 二卷二冊

跋文（也足叟素然）の末に「慶長二年」の年紀あれど此は作文の時代にて刊年に非ず、刊年是不詳。「御幸町二條仁右衛門 活板之」とあるは、慶長末と認む。

笑雲和尚古文眞寶之抄 十卷十三冊

元和三年孟春 (刊者名なし)

元亨釋書 三十卷十冊

元和三年孟秋 (刊者名なし)

白氏文集 七十一卷三十冊

元和四年七月 那波道圓跋

城西聯句 二卷二冊

元和四年霜月 二兵衛刊

新編排韻增廣事類氏族大全 十卷四冊

元和五年九月 (刊者名なし)

釋門自鏡錄 二卷一冊

元和七年三月 於江戸梓行

狹衣 四卷八冊

元和九年五月 心也開板

源氏物語 五十四卷五十四冊

元和九年孟夏 富杜哥鑑刊

貞觀政要 十卷十冊

元和九年初冬吉辰 三條白壁町忠田吉兵衛開板

慶長元和の刊年記載を有する活版本は略右の如し。此外に刊記を缺いて居るけれど此間のものと思しきものに、

論語 十卷二冊 要法寺版と稱す。
慈眼刊 正運刊 洛訥要法寺内開板

中庸 一卷

大學章句 一卷

右二書共に刊記 關東上總住今關正運刊

孟子 抄 十四卷七冊

於洛陽本能寺前開板

の四部がある。尙外に史記、漢書等大部物若干部があるらし。

偕て右次第を推して一考するに、活字版の多數は漢文の書物が主で、國字物は甚だ少い。國字物即ち假名交り文の書を出したのは

慶長六年の 徒然草壽命院抄 片假名交り

同 八年の 太平記

等に始まる。我國が漢字の書を刊行する先例に捉はれ過ぎた形である。學問は漢學に限るやうに思つて居た時代思潮の久しく續いた趣が此に見えるではあるまいか。尤も見た目に於て假名交りは甚だ不恰好であつて、漢字ばかりの書の整然端然たるには比べがたいのである。随つて漢文物が先に活印されて漸く國字物に及んだのは是非も無い。

元和から寛永に進むと假名本（全部又は主として假名）が次第に多くなる。即ち國人が國書を重んずるやうになつたのである。一方には學問の爲の書物ばかりでなく、文學愛好心の發露が濃厚になつたとも謂はれよう。

此くの如く慶長元和の古活字本は大體に漢字の書を取扱つて居るが、茲に一二の有力者が出て主として國字書を活印するに努力した。其製品は所謂光悅本及嵯峨本である。

光悅本及嵯峨本

光悦本

光悦は刀劍鑑定家として有名で、別に書畫、茶道、髹漆等にも一家を成し、多藝を以て前後無比の通人である。武家諸侯の眷顧を受け、家道頗る豊かで、洛北鷹ヶ峯の麓に大邸宅を構へ、自家の所親及諸職人を以て茲に一部落を作り、富力勢力殆ど王侯の如きものであつた。書道は殊に堪能で、初め近衛龍山公を師とし後諸家を探つて嶄然一大家となり所謂光悦派（又は本阿彌流）を成した。別號太虚庵、空中庵、自徳翁、徳友齋など云つた。近衛三藐院（信尹）、松花堂昭乘（瀧本坊惺々）と平安三筆の稱がある。（寛永十四年二月歿、年八十一）

此人は折角刊書の業が興つたに拘らず、支那の古典の覆刊を主とされて、國典の閑却されがちの事を慨き、此に發憤する所があり、自ら得意の書筆を以て版下を寫しそれを活字に作らせて優雅なる平假名本を刊出することを企てた。それには自家の趣味も手傳つて、用紙を選び装釘を美麗にして、天下の耳目を驚かせた。無論營利の念を離れ、製本は之を平生懇親の人々間に寄贈するに止めた。此頃はまだ出版業者といふ專業者も無いことであるから、出版は凡て有産者の自費に待つより外に無い。若し之を今日にしたならば所謂豪華版の最上位であらう。それから注意すべきことは光悦は假名活字をば必ず一字一字に切ることの餘りに機械的で無風味

なるを嫌ひ、二字又は三字、四字ぐらゐ連続して（ちろ、よし、まらん、まろし）の如く一見普通の書本を見るが如くして、讀書家の書物への親しみ方を深くさせた。此くの如くして出刊の活字本の主なるは

方	丈	記	一冊
百人	一首		一冊
諸	本	觀世流	百冊 二種あり、各別なり。
久	世	舞	一冊 二種あり、各別なり。

である。此外に整版に「歌仙」「扇の草紙」の二部があるが、姑く別として茲には省く。

此活版本の中、諸本は殊に版下に注意し、製本にも特別本、普通本の二様を區別し、特別本には用紙は雲母で種々の模様（光悦獨得の瀟洒なるもの、松、竹、蔓草、鹿、兔などを大膽に揮毫したもの、無論自筆畫）を置いたもの、紙は表裏を使い胡粉混りの重厚のもの、綴方は大和風で赤色の太白絲を以てし、外皮にも金泥畫模様を施した、華麗目を驚かす程である。尤も是は立派なる家々に寄贈した側のものである。抽斗ある箆子に納れて一部百冊を纏めた。普通本の方は用紙は普通、表紙に雲母文様を刷り、綴絲は白絲を用ゐ、是もや、簡單なる箆子に納

れた。今日多く所傳の本は此筆子を放れて五冊十冊と散つたものであつて、特別本の標本は容易に見られぬ。若しあれば全部數千金を呼ぶであらう。謠本には字傍に博士（音譜）を點ずるのが煩はしいが、それも克明に點じてある。之を活字で行ふのは極めて難事であつたらうが、渠は趣味の爲に敢てひるまなかつた。無論精力は憚くべきものである。久世舞の本は謠曲の蘭曲の別稱で、此本にも亦フシハカセを附して直に諷へるやうにしてあるが、是は僅々一冊（兩種あるが孰れも）であるから大した手數でも無かつたらう。

光悦の所刊は部數は少いが、此くの如き難儀の本を取扱つた點に於て賞揚に價する。從來師家の本を寫して謠曲を學んだものが、是に至つて版本の定本を得た譯である。後に元和に寛永に觀世流の家元から刊本（卯月本）を出したが、大に光悦本に負ふ所がある。

嵯峨本

次に嵯峨本は洛西嵯峨に居た富豪角倉與一光昌（號素庵、字玄之、蘇庵とも號す）が光悦の盛志に動かされて刊行したもので、慶長の中葉から寛永にかけて多數の假字書を發刊した。（寛永九年六月歿、年六十三）此人も土木業で家を起し（父了以を助けて）たに拘らず、大の趣味

家で、諸藝に精達し、殊に書技は光悦に學んで妙域に入つた。そこで幕府の學問奨勵に感奮して、亦自筆を以て活字を作らせ、光悦よりはやゝ實用ある書物を多數に刊した。其主なるは

伊勢物語	二冊
伊勢物語宵聞抄	三冊
徒然草	二冊
平家物語	十二冊
保元物語	三冊
平治物語	三冊
源氏物語	五十四冊
古今和歌集	三冊
撰集抄	十二冊

である。此外整版の「百人一首」「歌仙」二部があるが、姑く省く。但し嵯峨本は光悦本程の華麗みが無く、稀には用紙を重厚にし又文様付にした特別刷もあるが、それでも光悦本とは區別

することが出来る。随つて之を摸倣することも容易な點から、元和寛永所刊の町版の者で嵯峨本に近似したのも少くない。彼此相混交の憂がある。故に鑒識の無い人は嵯峨本の數量を多くしがちになるのは止むを得ぬ。一言にすれば嵯峨本は廣く世に行はれんことを主とし贅澤氣味を減じたもの、光悦本は趣味に出發して豪華を旨とした。然るに世間では久しく兩者を甄別せず、其兩者の書風筆致の似た點から之を一類にして居た。即ち嵯峨本と稱して光悦本をも含ませ、或は光悦本と謂ふ中に嵯峨本をも込めた。

光悦、嵯峨の兩版で當時の人々の嗜好を充たした事は少々でなかつた。是が一段の衝動になつて民間で盛に活版を出すやうになつた。此點に於て光悦、素庵兩人の功は偉大である。殊に國書の假名物が急に世間に出るに至つた。

出版業者の擡頭

活版刊行によつて書籍の數が多くなるにつれて、出版業及賣書業を専門とする人も世に出る

やうになつた。其最も先に顔を出して居るのは、慶長十四年酉年陽月下旬出版の

古文眞寶 十卷二冊

の刊記の年月下旬に記された

室町通近江町 本屋新七

である。本屋と明記したのは之を初とするが、續いて元和寛永になると所在地を書いて販賣の便に供したのは、元和三丁曆孟秋上旬出版の

元亨釋書 三十卷十冊

の刊記の處に

洛陽二條通鶴屋町 壽閣

元和四歲霜月吉辰出版の

城西聯句 二卷一冊

及び元和七曆九月吉辰出版の

梅谷策彦三千句 一冊

の各刊記の處に

二〇兵衛（町名は無い、知名の者と思し）

元和九年癸亥初冬吉辰出版の

貞觀政要

の刊記の處に

三條白壁町 忠田吉兵衛開板

寛永三年丙申秋下旬出版の

佛果園語心要 二卷二冊

の刊記の處に

於洛下四條寺町 中野市衛門尉刊摺之

などは書賈であらう。此う云ふ事も昔は無かつたのである。」

寛永中の活字本概説

慶長元和年間に培養された活字版流行熱は寛永に入つて彌々隆くなつた。其書物は漢籍の覆

刊と國書の上印と相半した。國書の多數は寫本から刊本を創製したものであつた。即ち古來の國文書で最初に刊本を得たのは此時代の活版によるのである。此點に於て徳川時代初季の活字本は往々後年の刊本の底本になつて居ると謂へる。勿論新に刊行する書物（概ね古典）に佳良の原本を求めたことは推察せられる。故に今日或書の校合をするのに古活版本に據るべきの理由は十分に在る。後世人のなまなかに手を加へた本よりも純真氣味を却つて古活版本に發見することがある。平家物語でも源氏狹衣にしても古活版本はなか／＼に佳い點がある。

寛永年間の活版本を盡く擧げるのは煩多に堪へぬから概説に止める。大體には四書、經書、老莊、唐宋詩文集など前年所刊物の重刊もあり、加之「近思錄」「冷齋夜話」「剪燈新話」「同餘話」「棠陰比事」「列山傳」「唐才子傳」から「龍龜手鑑」「古今韻會舉要」「說文解字家韻譜」などに及び、時好に應じて居る形である。併し此等は活印の容易なる漢字書ばかりであるが、寛永版の特長として國字書が著しく多くなつて來た。是も前年の古典二三の重刊に始まるが、必ずしも重刊に限らぬ。和歌、物語、舞之本（幸若）、鞠之書、假名草紙等が刊出を見た。

伊曾保物語

の如きも元和以來寛永に入つて更に刊行され、抄物即ち講義解釋の本も段々に出た。假名交り

本には平假名交りが多いが、片假名交りも少くない。平假名本には

- 大坂物語 一冊 繪入
- 寛永三年二條城行幸圖 三卷 繪入
- 義經記 八冊
- 天正記 九冊
- 四十二のものあらそひ 一冊
- 四しやうの歌合 二冊 繪入
- 昨日は今日の物語 二冊
- 竹齋 二冊
- 解紛記 二冊
- 驛駒全書 四冊
- 延壽撮要 一冊

の如きもの、又片假名本には

- 論語抄 九冊
- 諸抄 十冊
- 謡曲古抄 二十冊
- 日本書紀抄 三冊
- 太平記抄 六冊
- 源平盛衰記 二十一冊
- 平家物語 十二冊 (前年に平假名版あり)
- 信長記 十冊

などが其例である。

此外、大抵の古典は寛永末年までに凡そ一通りは活印された如く見える。

漢字書で活字版の一羣を成すものに佛書が有る。其種類は夥しいもので、とても漢籍の儒書や詩文集の比では無い。其中には當時品少になつて居た五山版の語録や聖教類を覆刊したに過ぎざるものも多い。佛書活版の大事業は、寛永四五年頃から末年までに大部分を印了した天海

大僧正願主の

佛説一切藏經

である。是は上野東叡山寛永寺印刷所を置き、前後約二十年に亙つ六千餘卷を印了したもので、所謂天海一切經又は寛永寺版藏經である。是には毎卷左の跋文が添はつて居る。

奉_ニ再興_一 佛説一切藏經

今上皇帝 玉體安穩 東照權現 倍增_ニ威光_一

征夷大將軍源家光公武運長久

四海泰平 國家豐饒 佛法紹隆 利益無窮

日本武州江戸東叡山 山門三院執行探題前毘沙門堂跡 大僧正天海願主

末に

寛永〇〇曆〇月〇日 林氏幸宿花溪居士使工人彫鏤之

右の林氏幸宿花溪居士は施主であらう。

寛永度の活版事業は是で最後を報じ、此一切經のみは次の正保年中に足を踏入れたが、一般

には正保年間には著しい活版は出なくなつた。

さて民間に於ける活字版の流行は漸く京洛外にも及び、叡山、奈良、高野の諸大寺でも活版所を設けて經論聖教類の刊行をした。叡山では若干部の活印本を出した中に、

法華三大部 四十卷

は最も有名で且つ大部のものである。

奈良の活版本は傳存のものが稀であるが、當時所用と思しき古活字が一盤東大寺の什物に在る。寺傳では寛治活字と稱して居るけれど、是は寛治版の成唯識論の殘存から推して其時所用と早斷したものであらうが、該書は整版であるから固_{カク}り妄誣である。定めて慶元頃の製であらう。此活字で印刷した本が見當らぬのは遺憾である。高野山にも木活字が若干残つて居る。此を用ゐて刷立てた聖教類があつたに相違無い。(西禪院所藏)地方にも活字本を刊行した處があるやうであるが、詳には分らぬ。

古活字版の衰頽及滅亡

古活字版は間々銅活字を用いた例があるのは既述の如くであるが、從來木を刻して文字を作る手際によかつた國民は費用の點、工作の容易なる點から木活字を多く用いた。即ち家康の駿河版ですら多數は木活字である。僧三要に與へた數十萬字の如きがそれである。此活字は現に山城國北山一乘寺村の國光寺（三要の隱居寺）に残つて居る。

民間に刊書事業が移つてからは尙更のことで、光悅や素庵の美本も木活に外ならぬ。然るに木字では不便が少くない。

第一 水分に肥大する、乾くと縮小する。故に餘程注意をして刷つても、一度に刷る部數に限りがある。先は五十部位より多くは一遍に刷れぬ。銅字の幾百遍にも堪へるとは比べ物にならぬ。

第二 一度組版を解いて一々の字を扁別に架藏する事は不熟の人には頗る困難煩瑣である。元來活字の用は幾度も其字を使つて幾十部部の書を印刷し得ると云ふ點に在るのだが、組むと解くとに從來の整版に見ない厄介がある。殊に國字（假名文字）を一字一字に切離さずに二三四五字も連結した形に作ると云ふ事が流行すると、眞意義に於ける活字では既に無いのであつて、此の如き複雑なる活字は第一回の印書には役立つても第二、第三の時には滅多に役立つた

ぬ。而も組版にも解版にも手數がかかる。随つて漢字書の本が先に早く活印されたが、國字書は比較的難物として後に廻された譯である。

活字版大流行は日本では外國のやうには便利の一點で讚美されなかつた。其證據には此間に於て整版本は決して跡を減しない、活版と兩々相并んで行はれて居る。甚しきは初手は活印して作つた書が絶版になつた場合などには、又多數に急に需要がありさうな場合などには、會て印行した本を母本としてそれを其儘影刻して整版に製して、それを以て前行活字本の代りとする。又活字本の或る一二枚が脱落して居る本などには之を補充するのに整版の一二枚を以てする。それ程に整版を作るには勞を勞とせず、活字を拾ふことを面倒がつた風がある。

それか 活版は機械的に過ぎて趣味に乏しいと云ふことは争はれぬ。光悅、素庵本の如きは活版に整版の心持を加味させて普通の活版本以上の美觀を得させたけれど、一版を起す毎に新しく活字を作るやうな事になつて、とても費用と手數倒れになる。此頃の活版本には異版の本で二三四五種あるものが生ずる。同一活字を使用するにしても排字のしかたが違ふことによつて慥かに異版と證せられるものが多い。例へば甲某と云ふ人が「徒然草」を一回活印するとして、其第一回の五十部の解版後に第二回の五十部を要求せられる時は、新に組立てるのである

から、字數行數は異ならぬでも、活字の同一のものが必ず同じ場所に置かれるとは限らぬ。假名にしても「あ」「お」「あ」など少しづつ、違形の字が元來作られてあるのを、手當り次第に抽出して使ふから、第一版と第二版とは全く別人乙某や丙某が印刷すると同様の結果を生ずる。故に此異版と稱すべきものが同一書について澤山に在ることになる。各版の本を對照せねば異版たることを審になし得ぬ程に古活字版は厄介物である。

活字版の後期に進むに従つて、漢字の傍に傍訓、送り假名、返り點又句點等を施すことを試みるに至つたが、是等は甚だ面倒であつたに相違無く、久しからずして休止して了つた。是は整版では左程に厄介では無い。

此くの如く色々の點が綜合されると結句、活版は餘り便利と云ふ譯に行かぬ。之に反して整版は日本人の先代から手慣れて居る業であるので、寧ろ活版を止めて元通りの整版に立返る傾が生じた。即ち寛永の末期には活整兩種が相半するに至り、正保から慶安となると全く活版に倦きて之を用ゐない事にして了つた。

畢竟木製活字にはかりたよつたからである。朝鮮のやうに泥字に移り鉛字に替り遂に銅に落付く迄の根氣を出さず、又西洋の如く、いきなり金屬活字に想到し、其金屬の範圍内で段々の

工夫を経て改良を重ねて、適當の合金に落著すると云ふ徑路を取らなかつた爲に、活字版は一日と多くの部數を要求して來た出版界には追つ付かなくなつて了つたのである。

光悦、素庵の如きは活字版に一規模を立て一機軸を起した人として貴ぶべきであるが、それは其人の生存の間の事で、他人に取つては變態假名や連續假名などの創案が祟つて、終には活字版を滅却するに至つた。即ち彼等は活版を興させて而して之を亡したやうな形である。

萬治、寛文年中にもかつ／＼活字版（殊に銅活字の）を以て印書した物好きもあつたが、世間は最早之を歡迎もしない。やがて元祿正徳頃には極めて拙劣の刻字及び版式で少々の活字本を出した者があつたが、極めて少數の好事家を喜ばせて止むだ。其書類は多く僧家の語録であるが、慶長以後の古活版本の復刊に過ぎなかつた。以後は整版本の復興となつて此方は支那宋元版の影刻やら、日本書の精巧版で大に文界を賑した。

活字版が朝廷に起り、尋で家康や秀頼の手で盛んになつたが、此等貴顯の企畫した版本には或は清原氏（朝廷の儒官）或は五山の傑僧等が大抵跋文を附して其盛舉を宣揚稱讚して居る。併しながら民間有志等が資を抛つて出版させた活字本類には概ね序跋も無く折角の事業に就い

て之を稱美する者も無いのは残念である。尤も活版で刊行することが稍々普遍的になつた故でもあらう。

活字版を組立て、之を印刷する業は室町時代から經典等の印刷（整版を）の業に當つて居た者が繼承的に従事した。即ち經師職の僧（半僧半工人）が専ら之に當つた。活字本の卷末に僧侶らしい人の名が（慈眼など又關東上總住今關正運の類）署印してあるのが其證である。但し後年になるに従つて俗人の名も出て来る。例へば下村時房（平家物語）などの如きである。次第に活字版職が定つて来る徑路が窺はれる。此下村氏の傳は不詳である。

大金を出し許多の勞力を犠牲にして一般社會の爲に活字本を刊行しながら、その施主らしい人の名も明ならず、名聞利益などを度外にして貴い古典の弘布に力めた人々の功績を挙げたいのだが、未だ其端緒をも發見し得ぬ。僅に本阿彌光悅、角倉の吉田素庵、壽命院立安等兩三人の名を舉げて止むより仕方が無い。活字本盛行の結果、出版業も一箇の職業となつた形迹が見える。

活字版によりて整刻せる本

或書の活字本出刊の後其本を母本として整版に造ること一種の流行の如くになつた。是は多衆の活字本を嗜好して居るのを見て取つた出版業者の一策とも視られるが畢竟は製作の簡便から起つたものであらう。其主なるものに

駿河版（慶長の）の七書（活）によつた

整版の七書

要法寺版の論語（活）によつた

整版の論語

今關版の中庸（活）によつた

整版の中庸

の一對づゝがある。古版本に熟せざる人は整版本なるを誤つて古活字版と認めることがあるけれど、よく兩者に見馴れたる人は容易に兩者を鑒別し得るのである。

繪畫挿入の活字版本

借刊本に繪畫挿入は既に鎌倉室町時代に起り、殊に繪を主とした所謂繪卷物に「融通念佛緣起」(應永二十三年完了)、「弘法大師行狀記」(刊年不詳、天文頃か)などがあるが、慶長以來の活版本にも繪を挿入するものが時々あらはれた。

嵯峨本の伊勢物語	二卷二冊
寛永(?)の大坂物語	一冊
同 四十二のものあらしひ	一冊
同 四生の歌合	一冊
戲言養氣集	一冊

の類がそれである。外に

寛永三年二條城行幸圖

三卷

は繪畫を主とした繪卷物であるが、此圖卷の特色は説明の文字の活字たるは勿論、圖まで活字式である。即ち行列の公卿武士等の一人又は一羣を一つの活字の如くして之を隨處に排印してある。繪畫までに活印を適用したものとして一の奇例である。此の如きは前後に類を見難い。

活字本の挿圖は概して稚拙で殆ど美觀をなすに至らぬ。文字は刻みなれて居るけれども繪畫は雕法に不馴な處でもあらう。又挿圖者たる畫家も後年程の上手でない邊もあらう。併し後二三十年にして菱川派などの名人が種々の本(整版本)に精巧な挿畫を施すに至るのも、活字本と云ふ前程があつたからである。是に至れば彫刻者も次第に慣れて來たのである。

活版本に限らず凡て書籍の挿圖に著色を施す事も早い活本の圖畫に始つて居る。それは墨一遍の版畫の上にあとから彩色を筆で染めるのである。通例丹、黄、緑の三色を極めて粗末にする程度。之を後世「丹綠本」と名ける。普通賣買の本には傳彩せず、特に若干部を特賣本として丹綠本に造るのである。是が後年一般の繪本に應用されて、後には一種の板(色板)を幾枚も使ふ事を發明して所謂錦繪を出すに至つた。然れば西川祐信以後の錦繪も夙く古活本の丹綠彩色に起因するとも謂へる。

古活字本掉尾の大業

活字本が寛永の末になるに随つて次第に影が薄くなつて行くときに當つて一絶大事業が起つ

た。それは寛永寺で大僧正天海（寺の開山、南光坊、天台の教義に精通し、臺邁剛毅を以て聞え、慶長以來家康の信任を蒙り、幕政に貢献する所が多かつた。寛永二十年十月二日寂、世壽百三十、勅諡慈眼大師を賜はる）の本願により林氏幸宿花溪居士と云ふ人の投資で出来た一切藏經の活字版である。寛永十四年三月頃から始り、天海の歿時を通り越して正保年中に入つて漸く大成した。所謂天海版、一に倭藏と云ふもので、六百六十五函、六千三百二十三卷を收む。日本に於ける藏經出版の嚆矢である。殊に活字を以てしたのは支那にも朝鮮にも無い事、誠に藏經史の一頁を飾るに足る偉業であらう。惜い哉此本は校訂が十分で無いとの評がある。又出版部数が案外少かつたと見えて現存の本は至つて少い。

此本の普及が狭いので寛文九年至天和元年の黄檗版（鐵眼本願）の整版藏經が企畫せられる事になる。但し槩版は明の萬曆藏經を全然反刻したもので大に劣等の評がある。恐らくは天海版にも及ばぬものであらう。

假名文字の活字版

活字版は漢字の書に始り後若干歳を経て國文の假名字本を出すに至つた。假名文字の最も古き活字版の一として殊に整つたものは、慶長癸卯（八年）春既望富春堂刊行の

太平記 四十卷四十冊

であらう。之を始として

慶長己酉年（十四年）陽月既望存庵跋（才雲刊之）

とある

太平記 四十卷四十冊

慶長十五曆庚戌二月上旬日春枝開板

とある

太平記 四十卷二十冊

時丙辰歲次元和二孟秋上旬日

とある

太平記 四十卷二十一冊

と續々と出刊を見た。是より先に

慶長六年也足叟素然（中院通勝）の跋ある

徒然草壽命院抄 二卷二冊

又

慶長九年日東洛陽如庵宗乾刊行の同書 二卷二冊

もあるが、二者とも甚だ整はぬ本である。併し時代に於ては古い。次で

慶長十年の

沙石集 十卷八冊

元和九年の

源氏物語（富社歌鑑刊） 五十四卷五十四冊

狭衣 四卷八冊

以下續々國文の物語草紙類が出た。

假名文の中片假名本先づ起り後に平假名本起り、活字版の後半期は殆ど平假名本ばかりにな

つた。此間前記光悦本、嵯峨本の物奥があり、

光悦本には

謠	本	百冊	二種
久世	舞	一冊	二種
方丈	記	一冊	
百人一首		一冊	

嵯峨本には

伊勢物語	二冊
伊勢物語宵聞抄（宵柏の聞書）	三冊
徒然草	二冊
源氏物語	五十四冊
平家物語	十二冊
撰集抄	四冊

保元物語 三冊

古今和歌集 三冊

を活印した。

是を見ると國文の純文學書類の刊出は此兩人の力で模範を示したことに見られる。光悦、素庵の風を望んで起り同じく假名物を活印する者甚だ多く、寛永末年頃までには殆ど總ての國文古典を活版にて公にしたと謂ひ得る。勿論儒書佛典類の漢文物と平行しての事である。

漢字文の活字本の大部物

本邦の學問と謂へば奈良朝の昔から儒學其他漢學を指したのである。其餘勢は徳川初期までも及んで居る。随つて家康の文教復興も半以上漢學復古の氣味を現して居る。朝廷の勅版（活版）事業も専ら儒書（四書孝經の如き）を先とせられた。家康は武將であつたから七書などの兵書を大事にしたが、尙「孔子家語」や「貞觀政要」に及んで居る。そこで民間でも之に倣つて儒教の書物（一般には漢籍）の發行に意を注いだ。

四書、孝經、小學、又老子、莊子、列子の如き小部の書は出版も容易い處から亦普及の性質も多い處から幾回も活版に上り、續いて「三體詩」、「古文眞寶」、「蒙求」の類に及び、終には

白氏文集 七十一卷三十冊

東坡詩 二十五卷

柳文

韓文 四十卷

山谷詩集注 二十一卷

鶴林玉露 十八卷

古今事文類聚 二百二十二卷

史記 百三十卷

前漢書 百二十卷

等に及び、決して大部の故を以て印行を躊躇する氣色は見えなかつた。勿論日本人作の

元亨釋書 三十卷十冊

日本書紀 三十卷三十冊

吾妻鏡(東鑑)

本朝文粹 十四卷八冊

などをも漢字物として漢籍の中に加へて出すことを嫌はなかつた。而も前記の中には屢々版を新にして前後活印數回に及んで居るものが少くない。史記、漢書の如き餘り多くの年月を隔てざる間に異版の出で居るには驚く程である。

結 論

以上要を摘んで略説した所から見ると、徳川初期に於て上下階級の人々が古典として瞻仰した程の書物は慶長から寛永に亙る僅々四十年間に殆ど全く印刷に上つて一般人の目に觸れる事になつた。大と無く小と無く和となく漢となく、人々の欲するまゝに之を手に取りれるやうになつた。それが不思議にも活字版に依つてゐる。若し慶長寛永間の活字流行と云ふ事が無かつたならば徳川期二百五十年の文獻上の盛況は果して之を観ることが出来たらうか。此う想到る

と古活字版の種子蒔きが江戸末期に於ける文籍上の收穫に非常偉大なるものを致したかと判るのである。

古活版時代は實に我國典籍史上の劃期的のものであると云つて差支あるまい。

是に於て吾人は、後陽成天皇や家康其他の遺された功績の偉大なることを稱へずには居られぬのである。又世に秀吉文祿征韓の役を無益の事業の如く云ふ人があるが、征韓役によつて彼國の文籍が多く活版であつた事や現に活字の實物を目にする事を得たのであるから、單に物質上から見ることを止めて精神上から観ると、仲々に功利のあつた事になる。太閤を只の野心家なりとしても、自然に其遺績の尋常ならぬ事を感じしめるのは頗る興味がある。それにしても秀吉の後を承ける家康無しでは秀吉一人で文勳をも擧げる譯には行かなかつたであらう。幕末の諷刺畫に信長と秀吉とに餅を造る準備をさせて家康が其出来たての餅を食つて居る圖があるが、とにかく最後の成功は家康に歸するのである。

第五節 西洋系統の活字版傳來

上に述べた所は源を朝鮮に發した活字版、即ち朝鮮系統の活字版が我國に入つての發達の由來を説いたのみであるが、此外に異文の國即ち遠い西洋から傳來の活字版についても一言を添へて置かう。

西洋傳來の活字が洋文のみのものであつたなら、それは單だ西洋から歐書を印刷する爲の具たるに過ぎぬから、洋書を舶來した事と餘り多くの懸隔も無い事になるやうな次第であるが、其初は洋文活字を齎して日本の地で洋書を印刷した後、洋文字を鑄造すると同じ方法を以て日本字（和字漢字）を鑄造して、之を和紙に印刷するに至つた。若し其等の書が普通の本で廣く内地に行はれるやうな事があつたなら、其結果は朝鮮系の活字と兩々相並んで日本の文獻界に寄與することになり、彌益活字本の流行を旺盛にしたであらう。然るに事は違つて、其活字本を作つた人が異教徒（基督教徒）で作られた書物は異教（基督教）を宣布する具たるの目的であつたので、此異教即ち耶蘇教が日本に容れられぬ事になつた爲に追々出版された本は悉

く燒却され、之を製造する宣教師等は國外に追はれる悲運に遭ひ、此筋の活版印刷事業は爰に滅絶し、元和寛永以後には其印本を内地に留めぬに至つた。それ故事跡は在つたとしても永繼せざるもので、殆ど日本全土の文界には無關係であつた。

歴史に徴すると日本に西洋人の來たのは天文十一年（西曆一五四二、距今昭和七年、凡三百九十一年前）葡萄牙人が種子島に來船して、其地の人に砲術を傳へたのを始とする。其後追々葡人等が日本の土地に接觸して、東西人の握手する機會があつたであらう。而して彼等はいつも耶蘇教を日本の新地に移植しようと試み、其序には西洋文物の輸入もあつた。其間に葡國の宣教師ヴァリニャーニ（Alexandor Valignani）と云ふ者が三回も日本に來た。其最後の第三回目が天正十五年の頃（西曆一五八七、後陽成帝即位元年、秀吉が聚樂城を築造した時）であつて、其時に西洋の印刷機と活字を鑄造する職工を伴ひ來つた。當時耶蘇教の根據地は肥前の天草に在り、其處に天主教會（Society of Jesus）が在つたが、此教會で件の印刷機と活字とを用ゐて、最初は歐文の本（宗教に關するもの）を出版し、後には國文字を鑄て邦文の本（同じく耶蘇教の弘布を助けるもの）を刊行した。其後此教會は天草から長崎に移されたが、印刷は相變らず打續いた。然る處徳川開府以後慶長十七、元和二年切支丹の嚴禁が發布せられ、西洋

宣教師の印刷事業も絶やされた。

既に印行された本も没收焼毀され、一紙半枚も根掘り葉掘りに探索されて世に残らぬことになった。幸にも其中の極めて少数が外國に傳はつた。それは日本で宣教に従事して居た教師等の歐洲に遁れた者が持つて往つたか何かで、辛うじて歐洲諸國に在つたのである。天草や長崎で耶蘇教師等の編纂上印した書物には左の二種があつた。

甲、羅馬字本——宗義カウリッの書

辭書

日本の物語（羅馬字、日本文）

乙、日本文——宗義の書

以上兩種の本を總括して Jesuit Mission Press の書と稱する。

日本に公使として名聲のあつた英人サー・アーネスト・サトウ (Sir Ernest Satow) 氏は西

洋と日本との文化の接觸事項について大に攻究に力めた人であつた。日本亞細亞協會 (Asiatic Society in Japan) を創立して同好の外人の領袖となつて色々日本の文物風習等を西洋に紹介した。此人が非常に注意して歐洲諸地方に逸存して居る Jesuit Mission Press の本を搜索して、十四部を發見した。而して之を目錄に編じたものが Contents of Jesuit Mission Press と題する一冊である。此十四部の本は古くは天正十九年（西紀一五九一）後は慶長十五年（西紀一六一〇）の二十二年間に印行されたものである。孰れも天草又は長崎の耶蘇教學林で教會長の檢閲を受けて居る。

十四部の中、歐文のものは姑く措く。日本文のものには

Racvovox (落葉集) 慶長三年 長崎版

Saluator Mundi (救世主) 慶長三年 長崎版

Doutrina Christian (ドチリナ・キリシタン)

慶長五年以前の二版
慶長五年の一版

共に長崎版

第五節 西洋系統の活字版傳來

Gvia do Pecador (ギヤ・ド・ペカドル) 慶長四年版

Contemplvs Myndi (コンテムツス・ムンヂ) 慶長十五年 都版

太平記拔書 (Vi este Liuro do Taifeiqui)

無刊年無刊地、未詳
恐らくは慶長中長崎にて印行

がある。文字は漢字は草行書體、假字は平假名、此兩者を交へたもの。是は此頃日本の民衆間に汎く行はれた書體であるから、それを學んだのである。平假名には變態假名が多く用ゐられてあるのも、當時通行の事である。殊に面白いのは二字連接の假名例へば

たゞ はゞ もて かく たく にも しき
たゞ、はゞ、もて、かく、たく、にも、しき

などを澤山に採用してある。恰も光悅、素庵等の國文物活字本に所見と揆を一にして居る。活字は悉く銅製で木製などは一も無い。用紙は美濃判の硬紙である。

右記數部の中、最後の二部は日本に現存し、他は歐洲の圖書館等に藏せられる。

コンテムツス・ムンヂの所藏者は東京の林若吉氏、太平記拔書は東京内野五郎三(岐享)氏で、前者は正表題紙 (t.p.) は羅旬語にて印刷、上邊に

CONTEMPTVS MYNDI

と記し、中邊に耶蘇教會の紋章を置き、下邊に

MIACIEXOFICINA FARADA

ANTONII.

Cum facultate ordinarij, et superiorum.

Anno 1610.

とある。而して裏面に

神お世の來千六百十年

あんでむはをむん地 世改いとひびを
まなびをもの経

慶長十五年四月中旬

と記してある。

此Fの輪郭は子持線（外太、内纖）である。但し本文は單線。本文中往々羅甸文を交へてゐる。多くはMoto風の文。

後者の太平記抜書は未見に付解説を缺く。但し此は日本書なれば、本文中に歐文を挿むやうの事は無がらう。毎巻の目次に第一篇とあるべき代りに、§（パラグラフ）の符號を用ひてあるさうである。こんな處に洋臭味があるのも面白う。

要するに *Contemptus Mundi* は明に教義の書であつて、日本の信徒に附與して信仰心を發せしめるもの、太平記抜書の如きは用途は判然しないが、寧ろ信徒の娛樂の爲の讀書料ともなり、西洋人の教師の日本文學、文字等學習の爲の料ともなつたのであらう。

羅馬字で記したものの中には「平家物語」を日本語の近世語にしてそれを外人にも讀めるやうに羅馬字で綴つたものがある。此等は内外の人に一は羅馬字を覚えさせ一は日本語を習はせる雙方の利益の爲であらうと思はれる。

ジエスイト派の宣教師等は此く迄に大努力をして弘教に精進したのである。其丹誠は驚くべきである。若し耶蘇教の信仰が自由に許されて、耶蘇教會の出版も公行されたとしたならば、

その所用の金屬製活字は日本の木活字を壓倒して、寛永末年以後に活字版の盛行をも繼續し得て、内國の出版を彌増に便利にしたかも知れない。さうなつた場合には外人の日本に於ける印刷事業は朝鮮系の活字版より結果に於てより重視すべきことにならう。殊に一種興味のあることは、天草長崎出版の本に用ひた國字が正楷で無く行草體である一事である。古代には（徳川初期）民間通行の書體は凡て行草打交りのものであつた。それを直に取つて活字の根本型としたのは民間に流布を専らにしようとした精神が見えて居る。今と違つて、昔は楷書は四角な文字として學者の用にはなつても、俗衆には嫌はれて讀まれもせず書かれもしなかつたものである。されば節用集の如きも多く行本の文字で記されてゐる。此點を考へると耶蘇教會の出版者はよく當時の我國民の嗜好習慣に適しようとなつたと謂へる。朝鮮系の方では活字は必ず正楷書になつて居るのに、西洋系の方では行草を主にし楷書を従として居る。但光悅本の國文物には漢字を多く行草體にして平假名との連絡を美整にして居ることは除外例である。行草書を見慣れて居る當時の日本人にはかたくななる正楷字を用ひてある純日本の活字本よりも、外人の國文本に親しみが深い筈である。然るに異教の嚴禁の爲に葡人等の出版事業が妨遏されて了つたので、此比較もなされずに終つた。

第六節 ジェスイト派基督教の流行及其活版印書業

基督教會 (Society of Jesus) 即ちジェスイト派のフランシス・ザヴィエル (Francis Xavier) は天文十八年七月三日西班牙より來航して鹿兒島に到着し、領主島津貴久を説いて其信仰を得其地の布教に従事し、後九州諸地方に宣傳して忽ちの内に多數の信徒を得た。就中豊後の大友宗麟、筑後の有馬晴信、細川忠興、肥前の大村純忠、筑前の黒田如水及長政の如きは熱心なる信者で、黒田如水、細川忠興等は羅馬字印を用ゐるに至つた。



忠興印



如水印



長政印

ザヴィエル後には九州の布教をコスム・ド・トレスに托し、イルマン・フェルナンデス (Irman

Fernandez) 及日本信者二名を伴ひて天文十九年の末平戸より博多を経て周防の山口に到りここに一月餘傳道後、京都に赴いた。然るに此頃は京都は將軍足利義輝近江に奔り、京中には三好長慶の亂ありて所在騒然たりしを以て、滯京僅に十五日にして和泉の堺に退去、そこから船して平戸に戻つた。その後再び山口に到り、大内義隆の厚遇を得て山口市の辻々には切支丹宗門許可の高札を打つた。信徒を得る若干人。

尋で天文二十年八月大友氏の招聘によりて九月豊後の府内に著き、大友宗麟に厚遇せられたが、佛教徒の外人、外教排斥運動に遭ひて身邊も危かりしかば、大友氏に別れて印度の布教を思立ち天文二十一年印度に歸り、日本に遣すべき宣布教師選定に従事し、更に支那に入らんと準備中、たま／＼病を得、天文二十二年春歿した、年四十七。

天文二十一年八月、ザヴィエル選定の布教師ガゴ (Barthazar Gago)、シルヴァ (Edward Silver)、アルカセヴァ (Pierre Alcaeva) の三人鹿兒島に到り、そこより豊後の大友宗麟の許に赴いた。時にトレスは平戸を去りて山口に在り、使者を出して三人を山口に迎へた。時に宗麟の弟義長、陶晴賢に迎へられて山口の大内氏を嗣ぎし後なれば山口と府内とは親密なる關係を有し布教には好都合であつたのである。

その後サヴィエル京都入の後八年に永祿二年(西紀一五五九)師父ガスバル・ヴィレラ(Cristóbal Vilela)九州より和泉の堺に來り、同年十月京都に入つた。當時將軍義輝復職し三好長慶執事となりて京中稍々安靜なりしかば、佛僧等の妨碍を顧みずして宣教に力め、遂に義輝將軍より布教自由の認許を得た。永祿六年一度焼亡せし天主堂を復興し、高山右近友祥、和田伊賀守維政等の名士を信徒にした。

然るに永祿八年正月、新來の師父ルイス・フロイス(Louis Froez)を伴ひて將軍義輝に謁し大款待を得、布教に従ひて益々好都合なりしに、同年五月義輝、三好の黨及松永久秀の爲に弑せられ、京都大亂となりしかば、ヴィレラは堺に避難し、こゝを根據として近畿の宣教に盡力した。

永祿十一年九月織田信長、足利義昭を擁して將軍として入京するや、和田維政、二人に説きてフロイスを堺より迎へしめて、信長の承認を得て會堂を開いた。

元龜二年フロイスの退京するや司祭オルガンチーノ(Sardi Organino)入京して信長の優待を蒙り、信徒二萬人の獻金を得て昇天寺(即ち南蠻寺)を建てた。信長此寺に近江甲賀の地五百貫を附けて異教を保護した。此時の切支丹宗の勢力は近畿地方に於て隆盛を極めた。

九州にては平戸は領主松浦隆信は引續き基督教を奉じ、大村の大村純忠亦貿易及外教を保護して住民の信教を自由にし、其頃開港場となれる長崎も外番通貿の要地となり、爰にも多數の信徒を得た。長崎の傳道は永祿十年より始まつたと云ふ。前に擧げたるヴィレラは此地で永祿十二年より翌年まで布教千五百名を信徒とした。

此の如く全國諸所に外教の流行を見るや、傳道の盛なるに伴ひて譯書の事業も興起した。其爲に西洋流の印刷術が日本に輸入された。其人はアレキサンドロ・ヴァリニャーニである。此人も宣教師兼教育家で日本に來るまでは東印度のゴアに居た。其處から印刷機械を持來つたのである。此人の來たのは天正十年正月日本を出發して羅馬に派遣の九州の諸侯有馬、大村、伊藤氏の正副使の歸朝と共にあつた。

是より、異教の中心地には學林(College)が建てられたが、天正十八年には有馬の學林は島原半島の加津佐に移り、翌十九年には天草の學校は大村に移つた。此寺の學校は教育方面に活動し、諸の宗教書(聖教の要點を説きたるもの、聖教の日課を輯録したるもの、懺悔を記したるもの、布教上必要と認めらるゝもの、諸聖徒の言行録等)又記述事業の爲宣教師が日本の語學文學を學習する上の書物を出版し、葡日對譯、日葡對譯辭書や、葡語又は羅句語にて日本語

の文法を述べたる書をも刊行するに至つた。

此等外教宣教師等の努力によつて我が國文學も幾分か外國人に玩味せられ、日本國人は西洋の寓話等を窺ひ知り、羅馬字も多くの日本人に領解せらるゝやうになつた。

天正十九年加津佐にてヴァリニャーニの將來印刷機で出版された本は

サントスの御作業の内拔書

(Sanctos no Gosagreo no vehi nvigigagi)

下部に「肥前國高來郡ゼススノコムバニヤノコレギオ加津佐に於てスーペリオレスの御許を蒙り之を版と爲すもの也、御出世以來一五九一年」とある。

(Filen no cvni Tacacv no gvn Tesvs no Compantia no Collegio. Cazusa ni voite Superiores no von yuruxi no comuri core no fan to nasu mono nari. Goxuxxe irai M D L XXXXI.)

本文二九四頁、目次二頁、正誤表四頁

Oxford Bodleian Library 藏

文祿元年 天草學林版

平 家 物 語

題言「日本の言葉と歴史を習ひ知らんと欲する人の爲に世話に和らげたる平家の物語、エススのコムバニヤのコレギオ天草に於てスーペリオレスの御免許として之を版に刻むものなり、御出世より一五九二年」

(NIFON NO COTOBA TO)

Histria no narai xiran to fossvrv fito no tamemi keva ni yava fagve tarv Feige no monogatari.)

下部に

(Iesus no Compantia no Collegio Amacvsa ni voite Superiores no go mengio to xite core vo fan ni qizamu mono nari. Go xuxxe yori M. D. L. XXXXII.)

本文四十六頁、目次及正誤表六頁

附録に左の五件がある。

イソップ物語

四書七書抄

五常

難句集

日葡語彙

British Museum Library 藏

然るに加津佐にてヴァリニアニ將來の印刷機と活字とを以て宗教書の印刷を見たるが、當時の長崎代官たる鍋島、毛利二氏は其事を秀吉に告げ、又ヴァリニアニが身元につきて疑義あることを報じたる爲に、秀吉も多少の疑念を生じたるが如く形勢稍々險惡となりしより、加津佐の學林及印刷所を天草に移し、爾後切支丹本は多く天草にて出版さるゝことゝなつた。

文祿元年 天草版

信仰之榮

題言「フィデスの導師として、ビ・エフ・ルイス・デ・グラナダ編まれたるその略、これをコムバニヤのスピーリオレスの御才覺を以て日本の言葉に和す。ゼススのコムバニヤのコレギオ天草に於てスピーリオレスの御免許として之を版に刻じものなり、御出世より一五九二年」

(Fides no Dōxi to xite P. F. Luis de Granada amaretaru xo no riacu.

Core vo Companhia no Superiores no go saicacu vo motte Nippon no ootoba ni vasu.)

下部 (Iesus no Companhia no Collegio Amacusa ni voite Superiores no go mengio toxite core vo fan ni qizamu mono nari. Go xuxxe yori M. D. L. XXXXII.)

譯者緒言三頁、伴天連ルイス宛グレゴリ十三世手簡四頁、著者序文五頁、信心録六一九頁、目次正誤表八頁、語彙二四頁

Leiden Library 藏

文祿元年 天草版

ドチリーナ・キリシタン

上題「日本のゼススのコムパニヤのスーパーオレスよりキリシタンに相當の理を互の問答の如く次第を分ち給ふ、ドチリーナ」

(NIPPON NO JESVS no Companhia no Superior yori Christian ni soto no cotovari vo tagaino mondō no gotoqu xidai vo vacachitanō DOCTRINA.)

下題「ゼススのコムパニヤのコレギオ天草に於てスーパーオレスの御許を蒙り之を版となすものなり、時に御出世年紀一五九二」

(Iesus no Companhia no Collegio Amacusa ni voite Superiores no von yufuxi vo cōnuri, core vo fan to nasu mono nari. Toquni go xuxxe NENQI, 1592.)

基督教義を師匠と弟子との問答體にして説明。第一至十二章。師匠の文句を XIXO とし弟子のを DEXI と擧出す。

東洋文庫藏

文祿四年 天草版

アルヴァレス (P. M. Alvares) の日拉葡語對譯辭書

上題 「DICTIONARIUM LATINO I.VSITANICVM, ac Japonicvm exambrohicale……」

下題 「IN AMACVSA IN COLLEGIO JAPONICO SOCIETATIS JESV cum facultate Superiorum. Anno M. D. XCV.」
Bodlein L., Oxford. Leiden L. 等藏

慶長元年版 (刊地不明なれど天草版ならん)

コンテムツス・ムンヂ

上題 「CONTEMPTVS mundi jenu. Core yo vo itoi, jesu christo no gooxexqi vo manabi tatematquru michi vo voxiyuru qio.」 (ナンキヤム

ス・ムンヂ 全部、これ世を厭ひエス・クリストの御行蹟を學び奉る道を教ゆる經)

下題 「NIPPON JESVS NO COMPANHIA no COLLEGIO nite Superiores no Sogvegi vo motte core vo fan ni firagu mono nari, Tōjini Soruxxe no nengi 1596.」(日本ゼススのコムバニヤのコレギオにてスーペリオルスの御下知を以て之を版に開くものなり、時に御出世の年紀一五九六)

慶長元年刊

有家銅版畫

竪八寸三分、横六寸六分の紙に印刷。フィリッピン島マニラにて發見、後大浦の天主堂に納付。有家は長崎縣南高來郡有家村を指す。此處に有馬侯はヴァリニャーニの勸によりて學林を建立。此學林にては宗教教育の外、音樂、繪畫、彫刻を教授せり。此銅版畫は有家學林に學びし日本人の作りしものな

らん。聖母マリヤの立像(基督を抱ける)なり。此類の畫を一般に有家銅版畫と稱す。此銅版畫によりて歐洲の銅版製作法が此頃普通の印刷術と共に日本に入りし事を窺ふべし。文化史の一葉を飾るに足る。

慶長三年版(刊地の記なければ長崎學林版ならん)

落葉集

上題 「RACVYOXV」

「IN COLLEGIO IAPONCO SOCIETATIS JESV. Cum facultate Superiorum. Anno M. D. XCVIII.」

用紙美濃紙百二枚。

初め六十二枚は熟字の辭書、イロハ順に漢字の熟語を排列し、之に邦語訓を施す。次の二十三枚はイロハ字集にて、邦語をイロハ順に排し之に漢譯を附す。最後の十七枚は百官及其唐稱の大略、日本餘州名、及び小玉篇と題するものを收む。

慶長四年版（長崎學林版？）

ぎや・ど・べかどる 二卷二冊（悪人を善に導く）

上題 [GVIA DO PECADOR]

下題 [IN COLLEGIO IAPONICO SOCIETATIS IESV. Cum facultate

Ordinarij, & Superiorum. ANNO M. D. XCIX]

漢字交りの平假名文

ルイ・グラナダ (Luis Granada) 著 Guia de peccadores を邦譯。上卷には

歐文と邦文との書名を扉の両面に印刷、下卷には邦歐兩文（上下歐文、中邦

文）混淆の扉あり。

邦文の處

御出世以來千五百九十九年

きやせをのとれ 罪人を善に導くの儀也

慶長四年三月中旬鏤梓也

British Museum Library 藏

慶長五年刊

ドチリーナ・キリシタン

羅馬字綴邦文

序文本文合五十八枚

上題 [DOCTRINA CHRISTIAN]

下題 [IN COLLEGIO IAPONICO SOCIETATIS IESV. Cum facultate

Ordinarij, & Superiorum. Anno 1600.]

此版は後藤版（長崎の外國貿易家にして、豊臣徳川期の間には有名なる後藤登明宗トマス？ 外國印刷術を彼國の植字印刷工に學びたる人）

慶長八年刊（長崎學林）

日 葡 辭 書

扉一枚、序文二頁、日本司教の出版許可一頁、特許狀一頁、本文三百三十枚、追加七十二枚。

上題 「VOCABULARIO DA LINGOA DE IAPAM.....」
下題 「COM LICENÇA DO ORDINARIO, & Superiores em Nagasqui
no Collegio de IAPAM Da Companhia de Iesvs. Anno M. D. CIII.」
Bodleian Library 藏

慶長九年刊(長崎學林)

日本文法書

扉、序にて四枚、目次一枚、本文二百三十九枚、合二百四十四枚。

Rodriguez 著。

上題 「ARTE DA LINGOA DE IAPAM COMPOSTAPELLO. Padre Ioto
Rodriguez Portugues da Copanhia de Iesv diuidida em tres LIVROS.」
下題 「Com LICENÇA DO ORDINARIO, E SVPERIORES em Nagasa-
qui no Collegio de Iapão da Companhia de IESV Anno 1604.」

東京帝大附屬圖書館等藏

慶長十年 長崎學林刊

セルケイラ編 切支丹禮儀全書

本文四百十四頁、索引四頁、序文等十四頁、合四百三十二頁、羅馬字綴日本
文。

慶長十二年 長崎學林版

スピリツアル修行鈔

竪五寸、横三寸三分の袖珍本。

上題 「Spiritual Xugvio no tameni yerabi alcunmuru Xvquanuo Manual.
Core IESUSNO COMPANIA ni voite amiatçuru mono nari.」

下題(略)

慶長十五年 長崎學林刊

フロスクリ (Flosculi)

新村出氏聖教精華と譯せり。新舊約全書等中より種々の佳句を抜抄。題目の

a b c 順に排列。聖典以外に Aristoteles, Solon, Seneca, Cicero, Homerus, Euripides, Virgilius, Plutarchos, Horatius, Plinius 等の句を引く。縦七寸九分、横五寸九分、日本の楮紙の厚きものに印刷、本文百九十枚。葡人エマヌエル・バレット (Emanuel Barret) 編。希臘賢哲の所説の面影を日本に傳へたるものゝ初。

慶長十五年 京都版

コンテムツス・ムンヂ (Contemtus Mundi)

平假名交りの邦文。日本人の讀むに便利。

内容は前掲歐文のものと同じ。

刊年未詳 (天草版、長崎版の別不明)

太平記拔書 六卷六冊

平假名交り邦文。

東京 内野皎亭氏藏

日本書誌學概説奥附

昭和十九年一月十五日初版印刷
昭和十九年一月二十一日初版發行

(二〇〇〇部)

● 定價金參圓五拾錢

特別行價 金拾四錢

合計金參圓六拾四錢

著者 和田萬吉

發行者 東京都麹町區丸ノ内三丁目八番地 村田鐵三郎

(會員番號一三七〇一六)

印刷者 東京都澁橋區下落合一丁目十八番地 石崎宋一

(東京二三四四)

配給元 日本出版配給株式會社

出版會承認
い50056號



發行所

東京都麹町區
丸ノ内三丁目八

有光社

電話丸ノ内(23)三〇二〇番・二〇七四番
振替口座東京六六六一五番

エト7W5

有光社刊行書

西本願寺法主 大谷 光照著	唐代の佛教儀禮	和綴紙入 特製二冊	價 送料四・二〇〇
文學博士 宮本 正尊著	増補 不動心と佛教	四〇四頁判	價 送料二・一五〇
今 春 聽著	順德天皇	御物順德帝 宸影御貸下 四〇五頁判	價 送料四・六三〇
辻 森 秀 英著	曙 覽 (あけみ)	三五五頁判	價 送料三・二八七
文學博士 和田 萬 吉著	能 と 謠	著者筆 挿繪入 三七〇頁判	價 送料二・九五五
檜 崎 宗 重著	美術と史學	三四〇頁判	價 送料三・六二〇
大谷 光 瑞著	隨筆百則	三〇六頁判	價 送料二・一五〇
エリゼ・ルクリュエ著 石川三郎譯	世界文化地史大系 (A5判・全六卷)	第一卷 三五二頁判	價 送料四・一七〇

終